

**まち・ひと・しごと創生総合戦略**  
**うるま市人口ビジョン改訂版**  
**(案)**



**令和元年 12 月 18 日現在**  
**うるま市**



# うるま市人口ビジョン改訂版(案) 目次

<b>1</b>	<b>うるま市人口ビジョン改訂版の趣旨</b>	<b>1</b>
1-1	背景と位置付け	1
1-2	対象期間（令和2（2020）年～令和42（2060）年）	1
1-3	国の長期ビジョンの概要	2
(1)	人口問題に対する基本認識	2
(2)	今後の基本的視点	2
(3)	目指すべき将来の方向	3
<b>2</b>	<b>人口の現状分析</b>	<b>4</b>
2-1	人口動向分析	4
(1)	人口の推移	4
(2)	年齢別人口の推移	8
(3)	人口動態	11
(4)	産業別就業人口	19
2-2	将来人口の推計と分析	23
(1)	社人研の推計による結果	23
(2)	市独自の推計による結果	30
2-3	人口の変化が地域の将来に与える影響の分析・考察	36
(1)	人口減少の原因分析	36
(2)	人口の変化が地域の将来に与える影響と課題	36
(3)	市民意識から見た将来人口に及ぼす影響と課題	37

## うるま市人口ビジョン島しょ地域編改訂版(案) 目次

<b>1 うるま人口ビジョン島しょ地域編改訂版の趣旨</b>	<b>38</b>
1-1 背景と位置付け.....	38
1-2 対象期間（平成27（2015）年～平成72（2060）年）.....	38
<b>2 人口の現状分析</b>	<b>39</b>
2-1 人口動向分析.....	39
（1）人口の推移.....	39
（2）年齢別人口構造.....	40
（3）人口動態.....	41
2-2 将来人口の推計と分析.....	44
（1）社人研の推計による結果.....	44
（2）市独自の推計による結果.....	46
2-3 人口の変化が地域の将来に与える影響の分析・考察.....	48
（1）人口減少の原因分析.....	48
（2）人口の変化が地域の将来に与える影響と課題.....	48





# 1 うるま市人口ビジョン改訂版の趣旨

## 1-1 背景と位置付け

国は、人口減少や急速な少子高齢化に対応するためには、地方の人口減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度な集中の是正が必要であり、またそれぞれの地域で住みよい環境を確保して将来にわたって活力ある日本社会を維持していくことが喫緊の課題とし、これに国と地方が一体的に取り組むための「まち・ひと・しごと創生法」（平成26年）を制定しました。

また、国は、人口の現状と将来の姿を示し、今後目指すべき将来の方向を提示する「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」（以下、「国の長期ビジョン」という。）を作成し、平成26年12月に閣議決定しました。

このような背景のもと、うるま市では、平成28年3月に人口ビジョンを策定し、「国の長期ビジョン」を踏まえ、本市の人口の現状分析を行い、人口に関する課題を市民と共有し、本市が目指すべき将来方向と人口の将来展望を示しました。

うるま市人口ビジョン改訂版は、平成28年策定のうるま市人口ビジョンを踏まえつつ、現状及び近年の人口動態等を考慮し、一部見直した計画とします。

## 1-2 対象期間(令和2(2020)年～令和42(2060)年)

本市人口ビジョンの対象期間は、国の長期ビジョンの期間を踏まえ、令和2(2020)年から令和42(2060)年までとし、最新の統計情報等を考慮し、必要に応じて5年ごとに見直すものとします。

## 1-3 国の長期ビジョンの概要

---

「国の長期ビジョン」の概要を整理すると次のとおりです。

### (1)人口問題に対する基本認識

#### ア. 人口減少時代の到来

- 2008年に始まった人口減少は、今後加速度的に進む。
- 人口減少の状況は、地域によって大きく異なる。
- 人口減少は地方から始まり、都市部へ広がっていく。

#### イ. 人口減少が経済社会に与える影響

- 人口減少は、経済社会に対して大きな重荷となる。
- 地方では、地域経済社会の維持が重大な局面を迎える。

#### ウ. 東京圏への人口の集中

- 東京圏には過度に人口が集中している。
- 今後も東京圏への人口流入が続く可能性が高い。
- 東京圏への人口の集中が、日本全体の人口減少に結びついている。

### (2)今後の基本的視点

#### ア. 人口減少問題に取り組む意義

- 人口減少に対する国民の危機感が高まっている。
- 的確な政策を展開し、官民挙げて取り組めば、未来は開ける。
- 人口減少への対応は、「待ったなし」の課題である。

#### イ. 今後の基本的視点

- 3つの基本的視点から取り組む。
  - ①「東京一極集中」の是正
  - ②若い世代の就労・結婚・子育ての希望の実現
  - ③地域の特性に即した地域課題の解決
- 国民の希望の実現に全力を注ぐ。
  - ・地方への移住の希望に応え、地方への新しい人の流れをつくる。
  - ・若い世代の就労・結婚・子育ての希望を実現する。
- 若い世代の結婚・子育ての希望に応える。



### (3) 目指すべき将来の方向

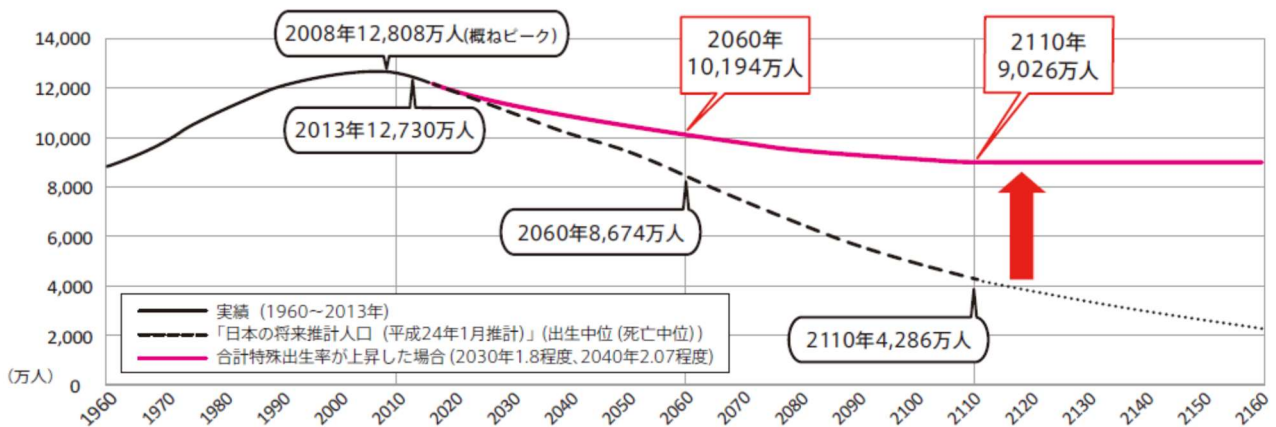
#### ア. 将来にわたって「活力ある日本社会」を維持

- 人口減少に歯止めをかける。
- 若い世代の希望が実現すると、出生率は1.8程度に向上する。
- 人口減少に歯止めがかかると、2060年に1億人程度の人口が確保される。
- さらに、人口構造が「若返る時期」を迎える。
- 「人口の安定化」とともに、「生産性の向上」が図られると、2050年代に実質GDP成長率は、1.5～2%程度が維持される。

#### イ. 地方創生がもたらす日本社会の姿

- 自らの地域資源を活用した、多様な地域社会の形成を目指す。
- 外部との積極的なつながりにより、新たな視点から活性化を図る。
- 地方創生が実現すれば、地方が先行して若返る。
- 東京圏は、世界に開かれた「国際都市」へ発展を目指す。
- 地方創生は、日本の創生であり、地方と東京圏がそれぞれの強みを生かし、日本全体を引っ張っていく。

#### ◆我が国の人口の推移と長期的な見直し



資料：内閣官房『まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」「総合戦略」』

## 2 人口の現状分析

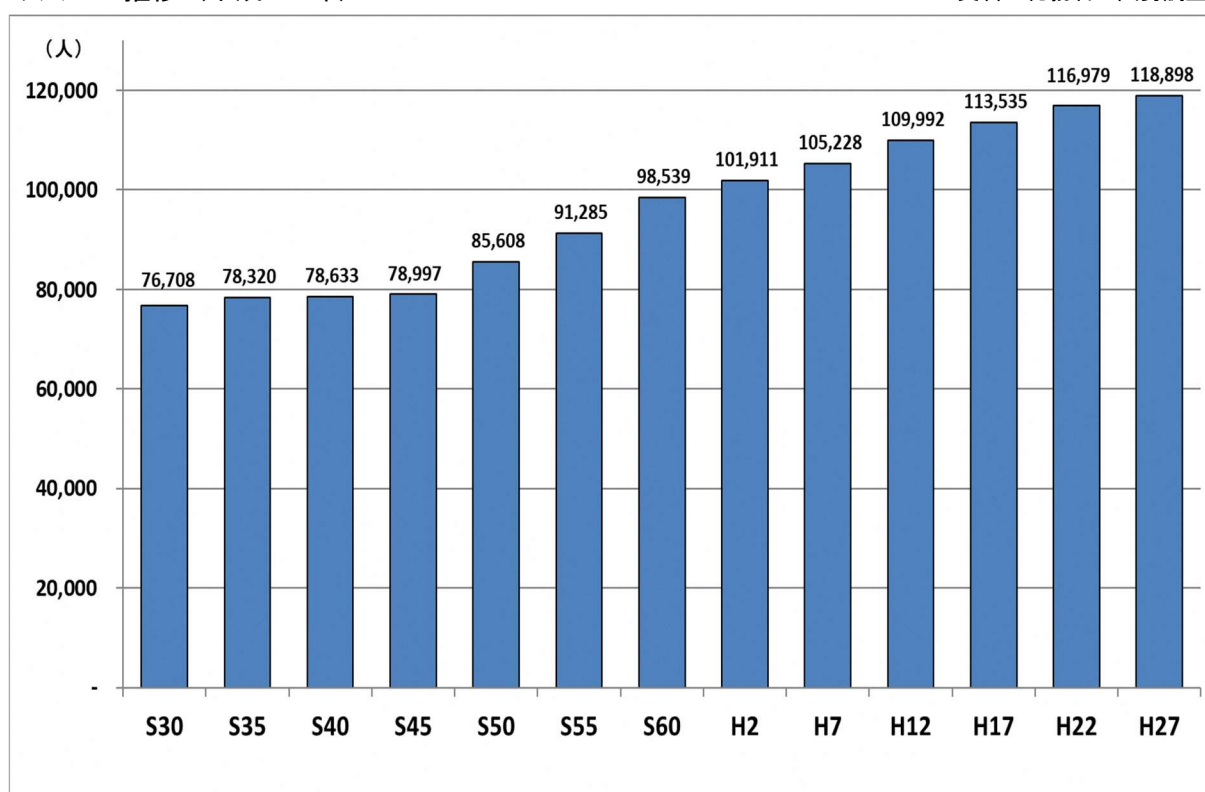
### 2-1 人口動向分析

#### (1)人口の推移

本市の人口推移を5年ごとに行われている国勢調査の結果から、市全体と地区別、中学校区別に分析します。中学校区別の分析はうるま市が合併した平成17（2005）年以降とします。

#### ◆人口の推移（平成27年）

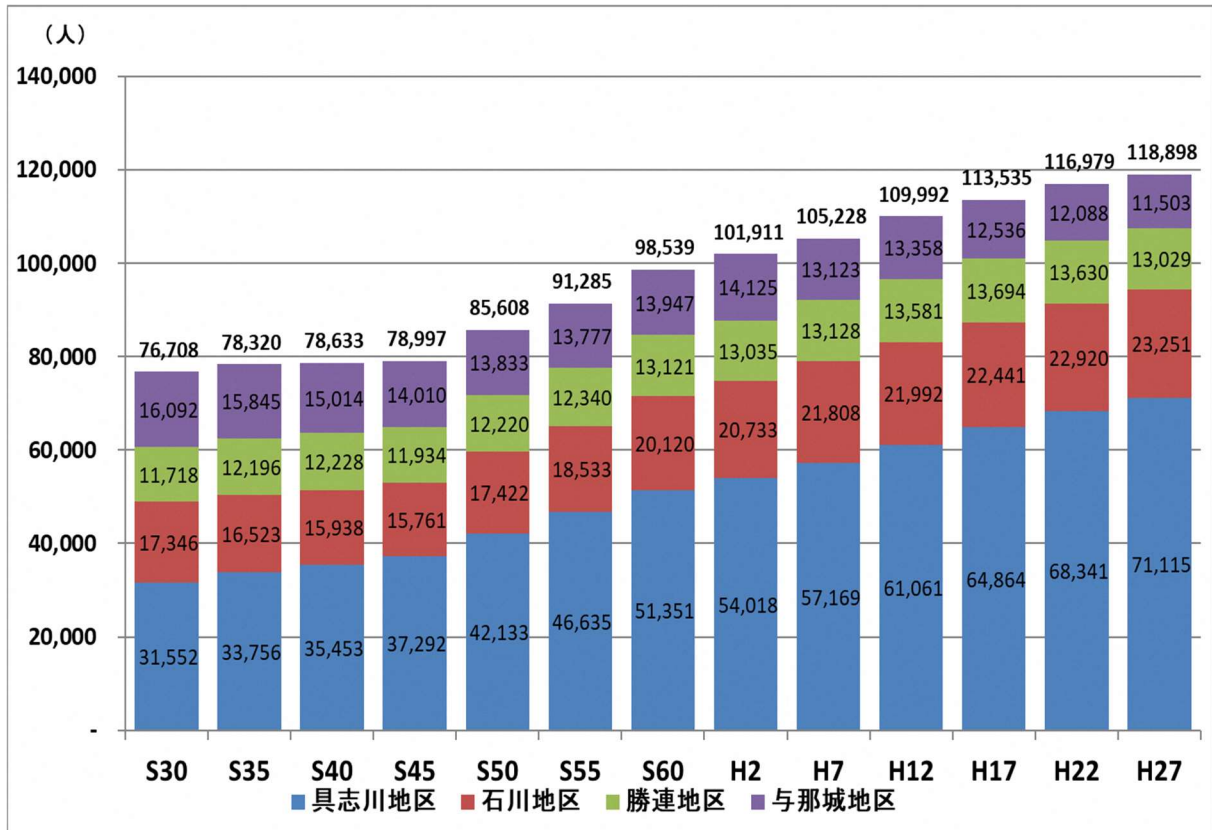
資料：総務省「国勢調査」



- ・ 本市は、平成17年4月1日に旧具志川市、旧石川市、旧勝連町、旧与那城町の4市町が合併して新たに設置された市のため、平成12年以前のデータについては合算して表示しています。
- ・ 人口推移を見ると、昭和30（1955）年から昭和45（1970）年までの人口は微増傾向でしたが、昭和45（1970）年から昭和60（1985）年にかけては急増し、その後も増加を続けており、平成27（2015）年までの約60年間で約1.6倍にあたる約4万2千人増加しています。
- ・ 昭和45（1970）年から昭和60（1985）年にかけて人口が急増した大きな要因としては、昭和47年の本土復帰後の県外企業の沖縄進出等や県外からの移住の増加、その後の経済的発展による増加が考えられます。
- ・ 昭和60（1985）年以降の人口は、伸び率は緩やかになったものの、本市ではその後も増加傾向にあり、平成27年4月末現在では約11万9千人となり、合併後も約5千人増加しています。

## ◆ 4 地区別人口の推移（平成 27 年）

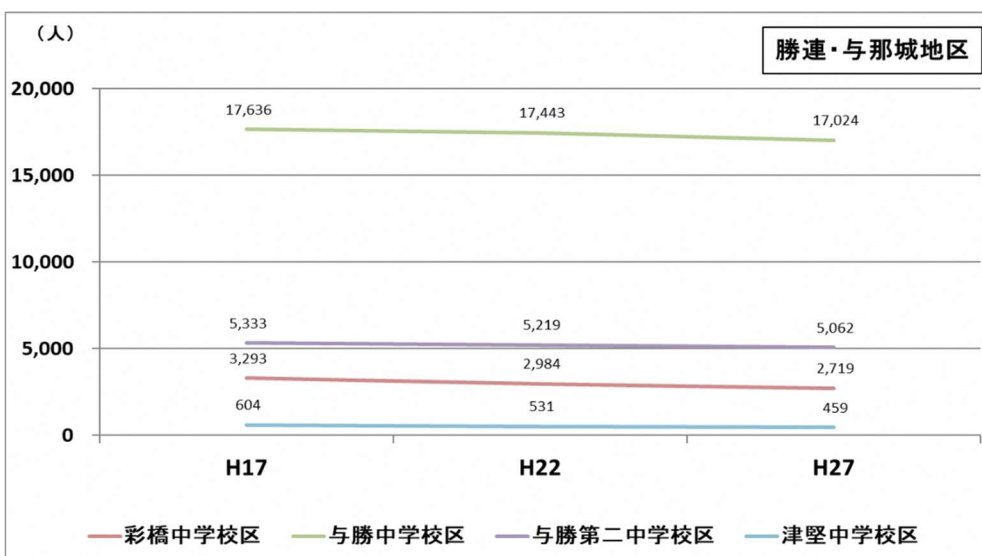
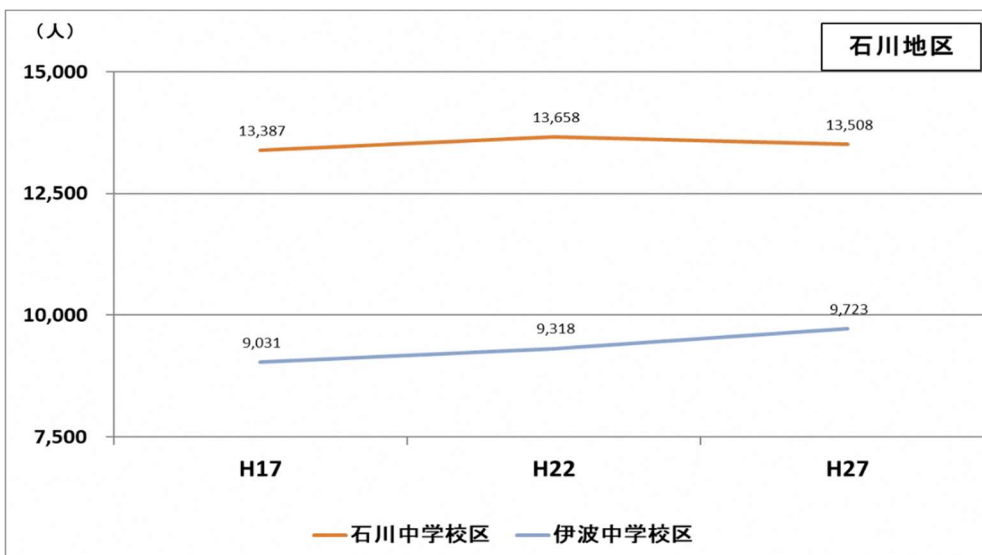
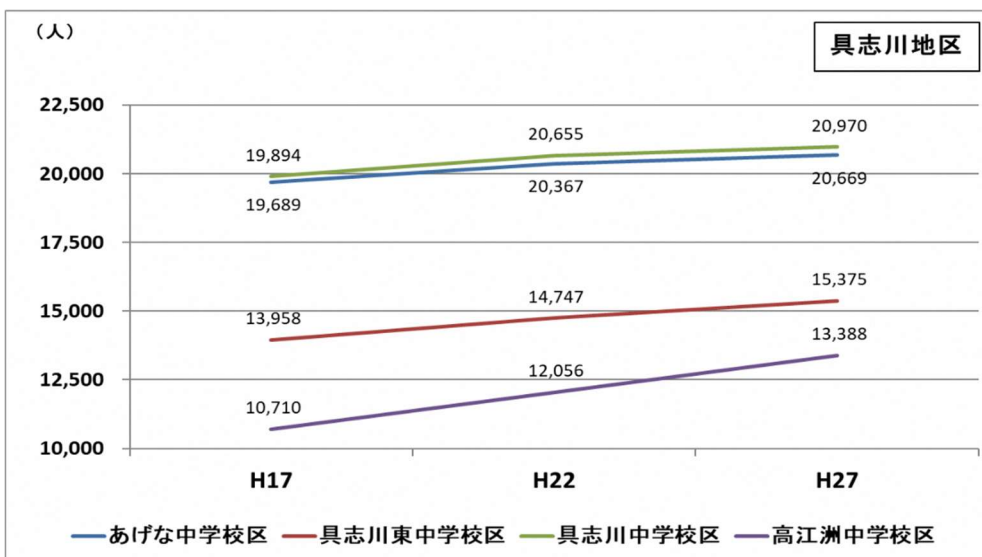
資料：総務省「国勢調査」



- ・ 人口の推移を地区別に見ると、具志川地区は一貫して増加傾向にあり、昭和 30（1955）年の約 3 万 2 千人が、平成 27（2015）年には約 7 万 1 千人となり、2 倍以上の増加となっています。
- ・ 具志川地区における人口の大幅な増加要因としては、他の地区からの転入に加え、米軍基地（天願通信所：現みどり町）の返還に伴う跡地利用による発展や、大型商業施設などの進出に伴う経済発展などが考えられます。
- ・ 石川地区の人口は、昭和 45（1970）年までは若干減少傾向にありましたが、それ以降は増加傾向に転じており、現在も微増傾向にあります。平成 27（2015）年の人口は約 2 万 3 千人で、昭和 45（1970）年の約 1 万 6 千人に比べ約 8 千人増加しています。石川地区の人口増加の要因としては、悪臭問題などの課題もありますが、下水道を始めとする公共施設などの生活インフラが比較的充実していること、また、ある程度生活圏がまとまっており、暮らしやすい環境が整えられているなどといったことが挙げられます。
- ・ 勝連地区の人口は、昭和 30（1955）年は約 1 万 2 千人で、平成 27（2015）年には約 1 万 3 千人となり、千人以上増加しており、その要因としては、近年工場などの誘致が進められている中城湾新港地区に近い南風原地域を中心とした人口の伸びによるものなどが考えられます。しかし、平成 17 年をピークに減少傾向に転じています。
- ・ 与那城地区の人口は、減少傾向にあり、昭和 30（1955）年には約 1 万 6 千人でしたが、平成 27（2015）年には約 1 万 2 千人となり、約 4 千人減少しています。その要因としては、平安座島、宮城島、伊計島といった島しょ地域から市内市街地などへの人口流出が考えられます。

◆中学校区別人口の推移（平成 27 年）

資料：「住民基本台帳」



- ・ 地区ごとに見た人口の推移と同様に、具志川地区は人口増加が進んでいることが分かります。その中でも特に高江洲中学校区の人口増加が顕著です。あげな中学校区、具志川中学校区は平成 17（2005）年から平成 27（2015）年の間の人口増加が 1,000 人程度ですが、高江洲中学校区は 3,000 人程度の増加となっており、市全体の人口にも大きな影響を与えていると伺えます。
- ・ 石川地区では、石川中学校区がほぼ横ばいに推移しているのに対し、伊波中学校区は緩やかに増加し、地区全体としては人口増加となっています。
- ・ 勝連・与那城地区では全ての中学校区で人口減少が続いており、島しょ地域のみならず地区全体での人口減少が深刻であることがうかがえます。勝連・与那城地区で最多人口である与勝中学校区の人口は年々減少しており、平成 17（2005）年から平成 27（2015）年にかけて 600 人程度の人口減少となっています。島しょ地域は人口減少幅が大きく、平成 17（2005）年と平成 27（2015）年を比較すると彩橋中学校区はおよそ 17%、津堅中学校区はおよそ 24% の減少となっています。

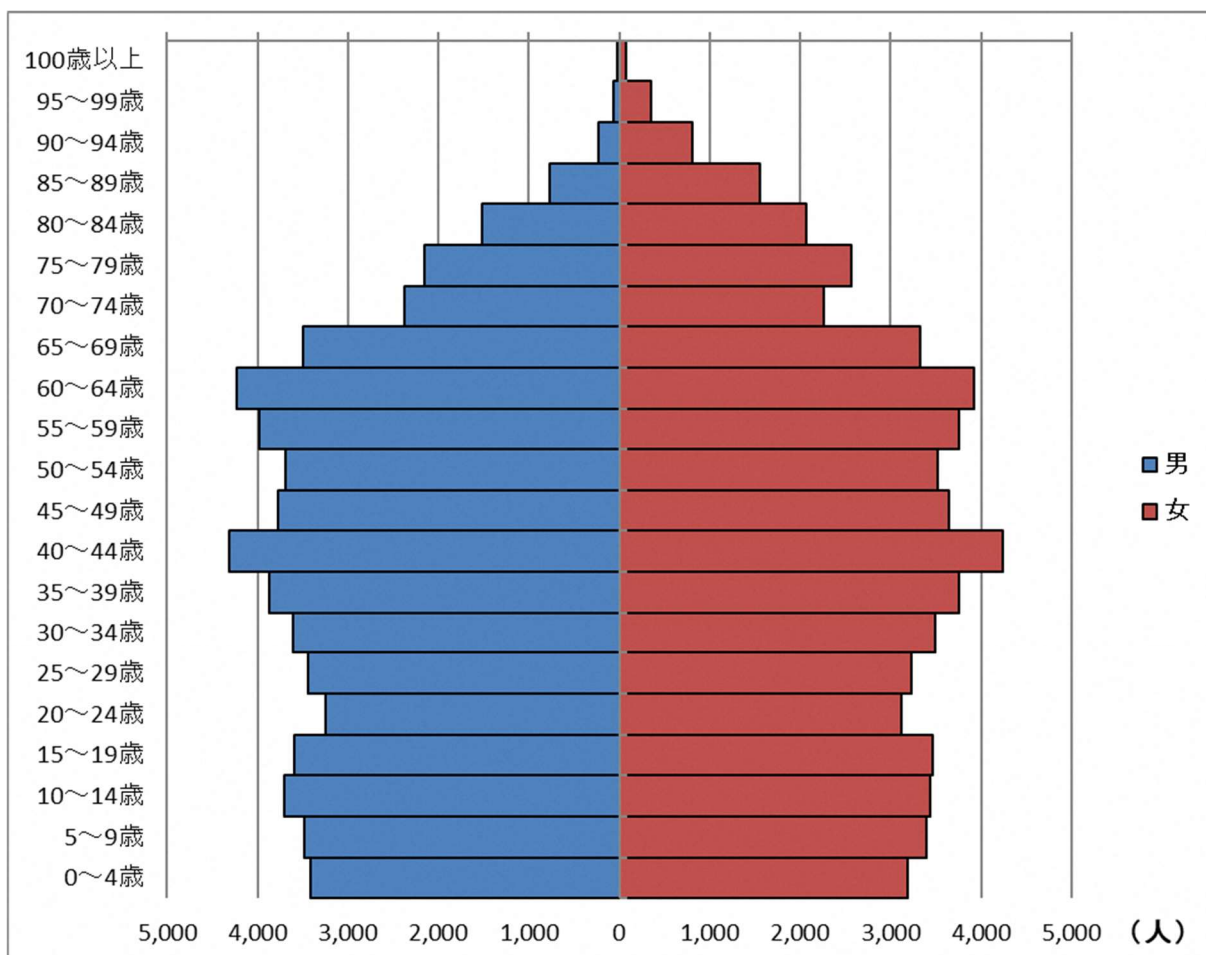
## (2)年齢別人口の推移

### ア. 人口ピラミッド

本市の男女年代別人口構成を、市全体と地区ごとに分けた人口ピラミッドで分析します。

#### ◆うるま市の人口ピラミッド（平成 27 年）

資料：総務省「国勢調査」

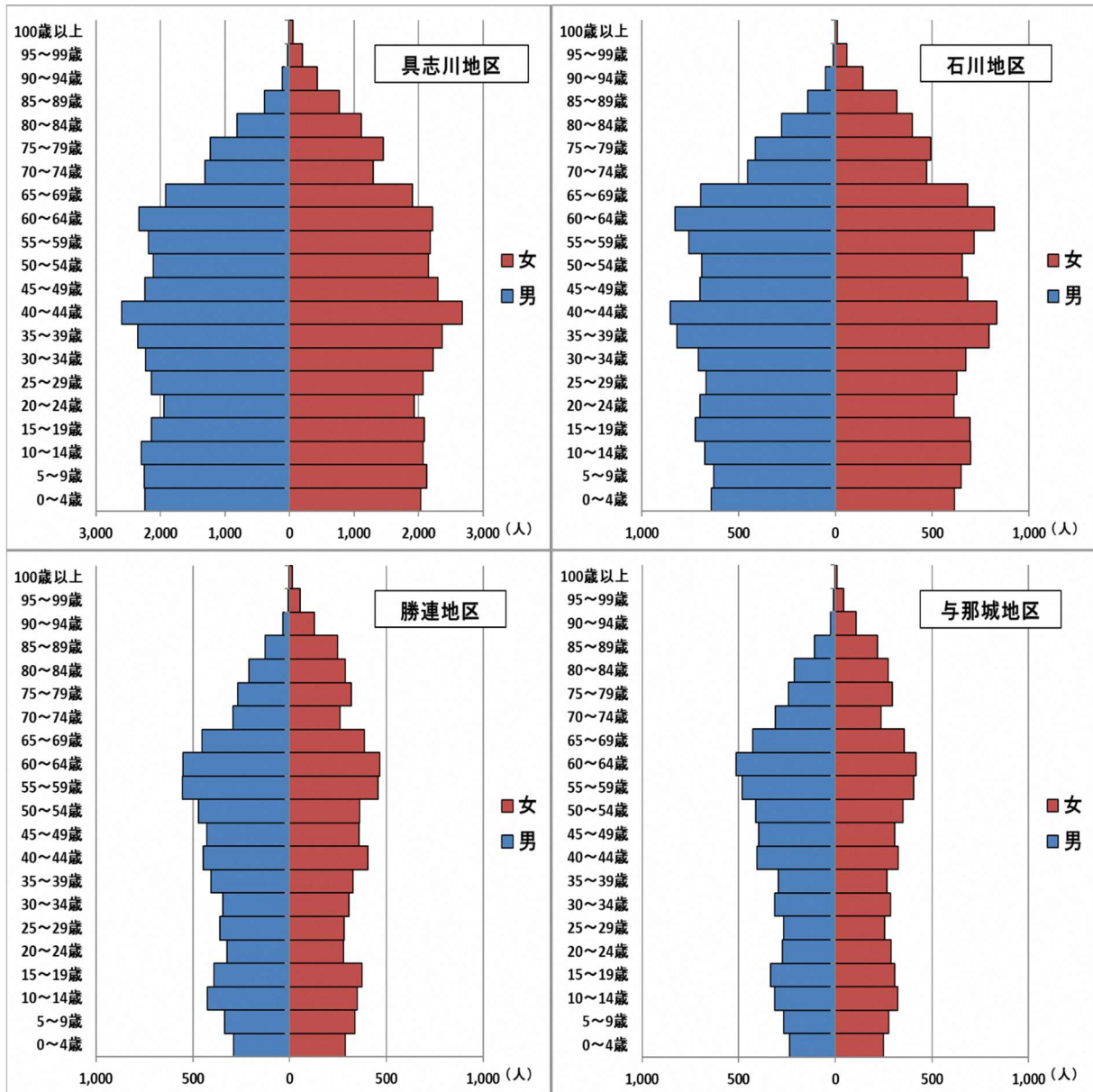


- 市全体の人口ピラミッドを見ると、傾向としては老年人口が比較的少なく、生産年齢人口が多い、一般的に人口が安定する状態とされる「つりがね型」になってはいます。しかし、生産年齢人口のうち 39 歳以下及び年少人口は少ない傾向にあり、将来的には少子高齢化が進むものと考えられます。
- 特徴としては、60 歳～64 歳の人口が男女とも多いことが挙げられます。全国的には、65 歳～69 歳のいわゆる団塊の世代と呼ばれる第一次ベビーブームに生まれた世代が多い傾向にありますが、沖縄では終戦前後による影響を強く受けたため、その後の世代である 60 歳～64 歳の人口が多くなっているものと推測されます。また、40 歳～44 歳の人口も男女共に多いことが挙げられます。これは昭和 46 年から 49 年にかけての第二次ベビーブームによるものと考えられます。これらの世代が今後、20 年程度は現役世代としての活躍が期待されます。



## ◆4 地区別人口ピラミッド（平成 27 年）

資料：総務省「国勢調査」



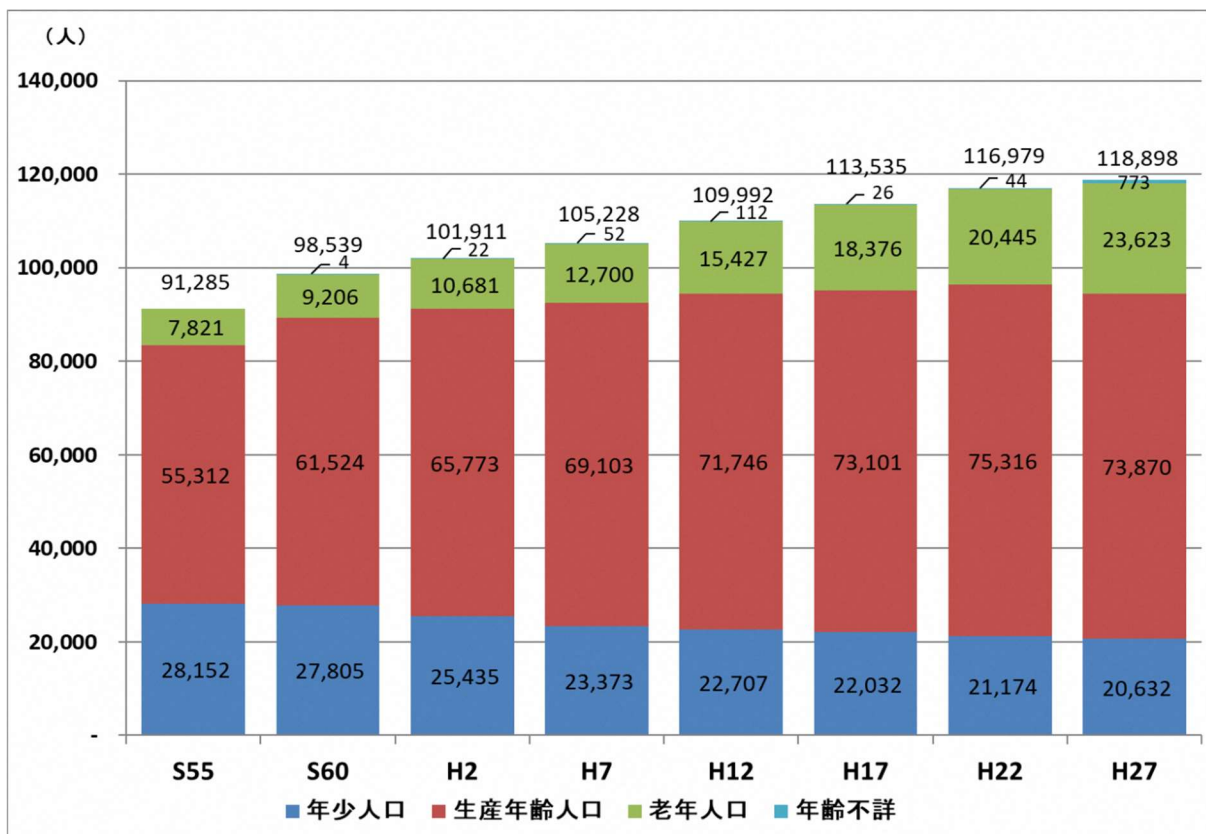
- ・ 4地区ごとに人口ピラミッドを見ると、まず具志川地区と石川地区では市全体の傾向と同じく「つりがね型」をしており、老年人口が比較的少なく、生産年齢人口や年少人口が多い傾向となっています。
- ・ 勝連地区は、「つりがね型」よりもやや年少人口が少ない「つぼ形」に近い傾向となっており、具志川地区や石川地区に比べ、人口を構成する年齢層が比較的高めとなっています。
- ・ 与那城地区は、より「つぼ形」に近い人口構造になっており、年少人口が少なく、老年人口が多い少子高齢化が進んでいます。この状態は、今後とも人口が減少していく傾向を示しています。

## イ. 年齢3区分別人口

本市の人口推移を0歳～14歳までの年少人口、15歳～64歳までの生産年齢人口、65歳以上の老年人口の年齢3区分別に分けた視点から分析します。

### ◆年齢3区分別の人口推移（平成27年）

資料：総務省「国勢調査」



- まず、生産年齢人口について見ると、市全体の人口増加に伴い、昭和55（1980）年から平成27（2015）年までの35年間で約1万8千人増加しており、現在、市の総人口の約6割強を占めています。ただし、昭和55（1980）年から平成22（2010）年まで一貫して増加傾向であったものの、平成22（2010）年から平成27（2015）年は減少しています。
- 年少人口は、昭和55（1980）年以降減少傾向にあり、平成27（2015）年までの35年間に約8千人減少しており、本市でも明らかに少子化傾向が顕著となっています。
- 逆に、老年人口は、一貫して増加傾向にあり、昭和55（1980）年の約8千人が、平成27（2015）年には約2万4千人へと、約3倍の大幅な増加となっており、本市でも高齢化が急激に進行していることがうかがえます。なお、平成27（2015）年には老年人口が年少人口を上回るといった、いわゆる逆転現象を起こしています。



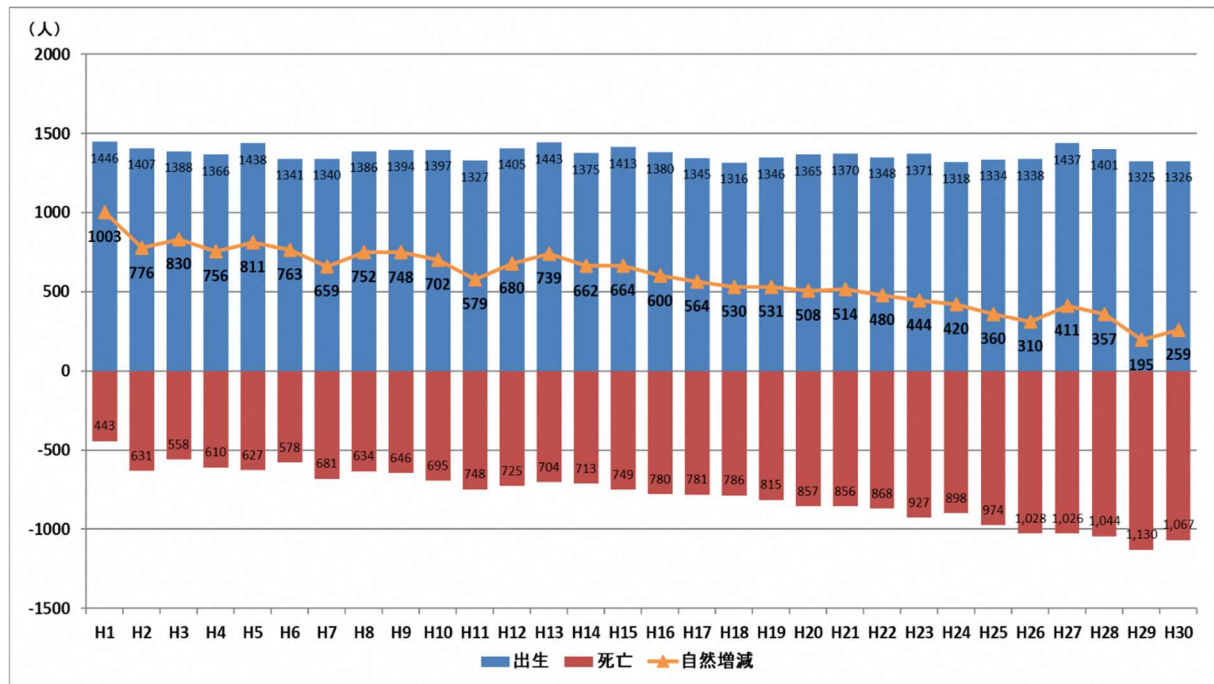
### (3)人口動態

#### ア. 自然動態の推移

各年の出生数と死亡数のデータから、転入・転出等の影響を除いた本市のいわゆる自然な状態における人口の推移を分析します。

#### ◆出生数・死亡数の推移（平成 30 年）

資料：沖縄県「人口移動報告」



- まず、出生数の推移を見ると、平成元（1989）年から平成15（2003）年までは1,400人前後で推移していましたが、平成16（2004）年からは平成27（2015）年と平成28（2016）年を除き、1,400人を下回る状況が続いています。
- 出生数が減少している要因としては、若い世代のライフスタイル・価値観の変化に伴う晩婚化の進行、経済状況の変化（悪化）による世帯当たりの出生率の低下による事が大きな要因と推測されます。
- 次に、死亡数の推移を見ると、年々増加していく傾向を示しています。最も死亡数が少なかった平成1（1989）年の443人と、近年最も多かった平成29（2014）年の1,130人とを比較すると、約2.6倍の増加となっています。
- その要因としては、高齢者の急激な増加に伴い自然死による死亡数が伸びているものと推測されます。
- また、出生数と死亡数の推移を比較すると、年々その差が縮まってきていることが明白です。出生数から死亡数を差し引いたいわゆる自然な状態における人口の増加が鈍化しており、平成元年（1989年）に最大で1,003人あった差が、平成29（2017）年には195人の差まで縮まっており、この事からも少子高齢化が確実に進んでいることがうかがえます。なお、平成元（1989）年から平成30（2018）年までの累計では17,607人余りの自然増加となっており、市人口の増加に寄与していると考えられます。

## イ. 合計特殊出生率の推移

合計特殊出生率とは、一人の女性が一生のうちに生むであろうと思われる子どもの数を示し、15歳から49歳の女性の年齢ごとの出生率を合計した数字です。人口を維持するのに必要な合計特殊出生率は、2.07とされています。

市及び地区別の合計特殊出生率の推移を、国や沖縄県の平均と比較しながら分析します。

### ◆合計特殊出生率の推移

資料：厚生労働省「人口動態特殊報告」

	S58～S62年	S63～H4年	H5～H9年	H10～H14年	H15～H19年	H20～H24年
国	1.76(※1)	1.54(※2)	1.42(※3)	1.36	1.31	1.38
沖縄県	2.25	2.03	1.9	1.83	1.74	1.86
うるま市	-	-	-	-	1.84	1.85
具志川地区	2.29	2	1.93	1.89	-	-
石川地区	2.31	2.08	1.95	1.87	-	-
勝連地区	2.39	2.15	1.93	2.02	-	-
与那城地区	2.24	1.8	1.78	1.74	-	-

(注)※1は1985年、※2は1990年、※3は1995年の値

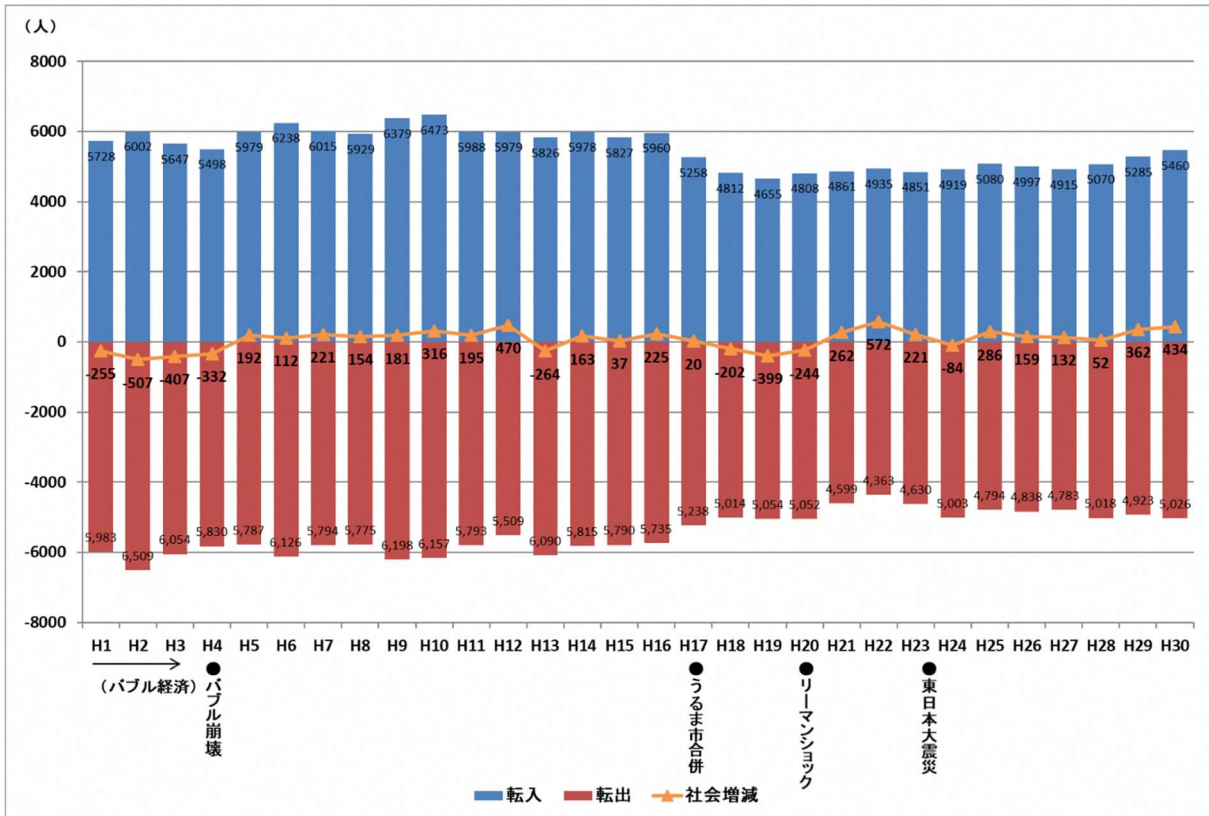
- まず、市全体の合計特殊出生率については、その性質上単純な合算ができないことから、合併前のデータがなく、市としてのデータは、合併前後の平成15(2003)年から平成24(2012)年までの平均値のみが示されています。その間の平均値は、平成15(2003)年～平成19(2007)年が1.84、平成20(2008)年～平成24(2012)年が1.85となっており、国全体の平均値の1.31並びに1.38をともに上回っている状況にあり、沖縄県平均とほぼ同程度の数値となっています。しかしながら、人口を維持するのに必要とされている2.07は下回っているため、今後は緩やかながら人口が減少することが推測されます。
- 地区別の合計特殊出生率の推移の状況を見ると、昭和58(1983)年～昭和62(1987)年までは、全ての地区で2.3前後の数値となっており、人口増加の大きな要因であったものと推測されます。
- その後は、国の平均値よりは高いものの、全ての地区で数値の減少が見られ、特に、与那城地区では、他の地区と比較しても減少幅が大きくなっており、与那城地区の顕著な少子高齢化の大きな要因になっているものと推測されます。

## ウ. 社会動態の推移

各年の転入数と転出数のデータから、本市における社会的な要因に基づく人口動態の推移を分析します。

### ◆転入数・転出数の推移（平成 30 年）

資料：沖縄県「人口移動報告」



- まず、平成元（1989）年から平成16（2004）年までの転入・転出数のデータについては、合併前の4市町間の移動も含まれていますが、合併後の平成17（2005）年以降は、うるま市となったため、データから省かれています。その結果、平成16（2004）年から平成17（2005）年にかけては、転入・転出数ともに大幅な減少になっているものと考えられます。このことから、合併以前から4市町間での移動が活発であった事が推測されます。
- 次に、転入数の推移を見ると、平成元（1989）年から平成16（2004）年にかけては6,000人前後で推移し、平成10（1998）年に最大で約6,500人の転入数となっています。その後、転入数は減少し始め、特に平成17（2005）年から平成19（2007）年の間に合併による統計の取り方の変更もあって急激に減少していますが、平成20（2008）年からは持ち直しつつあります。
- また、転出数の推移を見ると、平成2（1990）年に急激に上昇しピークを迎え、その後の平成13（2001）年までは6,000人前後で推移しています。なお、転入・転出の際の理由等についてはデータとして記録されていませんが、平成2（1990）年頃に転出がピークを迎えた頃について、ちょうど第二次ベビーブーム世代の就職時期に重なることから、その世代を中心に就職や就学などにより圏外に転出した若年者が多かったものと推測されます。
- その後、転出数は平成14（2002）年からは減少傾向になり、特に平成17（2005）年から平成18（2006）年の間に、合併による統計の取り方の変更もあって急激な減少を始めますが、平成

23（2011）年を境に増加に転じています。

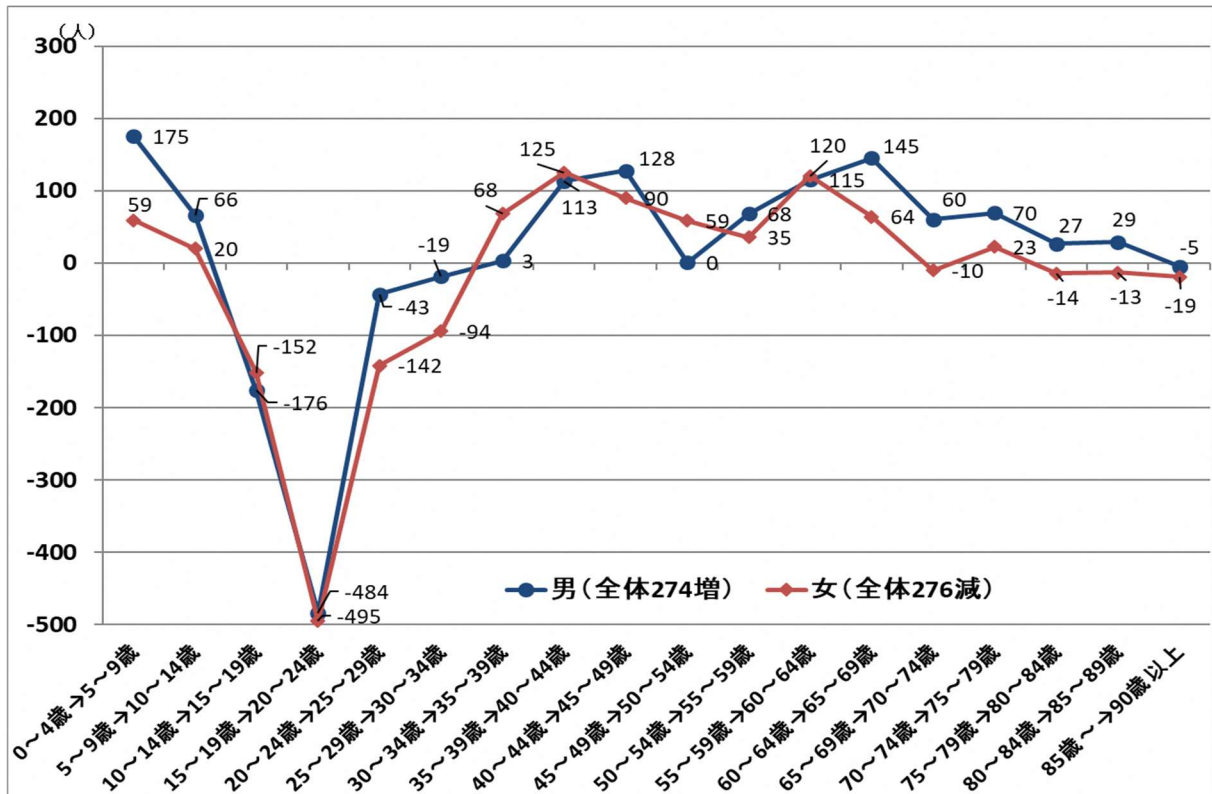
- 平成 20（2008）年から平成 22（2010）年にかけて、転入数の増加傾向、逆に転出数が減少傾向にあったのは、リーマンショック後の経済停滞に伴い、職を失い県外などから戻った市民や、また県外での就職機会が減少した事などに伴う現象ではないかと推測されます。その後、経済状況の好転に伴い、転出数が再び増加傾向に戻ったものと思われます。
- 転入数と転出数の推移を比較すると、それぞれ若干の増減を繰り返してはいますが、全体的にはほぼ連動するような動向を示していることから、若年者を中心に圏外へ転出した市民などが、一定の期間を過ぎると再度、転入するといったことを繰り返しているケースが多いのではと推測されます。また、転入数から転出数を差し引いた社会増減では、平成 2（1990）年に最大で 507 人の転出超過、平成 22（2010）年に最大で 572 人の転入超過となっています。なお、平成元（1989）年から平成 30（2018）年までの累計では 2,072 人余りの転入超過となっており、市人口の増加に寄与しているものの、自然増に比べると比較的到低い数値となっていることから、人口増減にそれほど大きな影響はないものと考えられます。

## エ. 性別・年齢階級別の人口移動の状況

年齢階級別の人口移動を把握することによって、平成 17 (2005) 年～平成 22 (2010) 年の転入超過・転出超過のデータを基に最近の傾向を分析します。

### ◆性別・年齢階級別の人口移動の状況 (2010～2015 年)

資料：総務省「国勢調査」



#### ①男性

- 本市における男性の年齢階級別の人口移動の特徴は、まず 10 歳～14 歳から 15 歳～19 歳になるときから 25 歳～29 歳から 30 歳～34 歳になるときにかけて、転出超過となることです。特に、15 歳～19 歳から 20 歳～24 歳になるときに大幅な転出超過になっており、これは、市外の高校や大学への進学や、卒業後の就職等に伴う転出によるものと考えられ、若年者の雇用の受け皿が少ない事などが影響しているものと推測されます。一方、30 歳～34 歳から 35 歳～39 歳になるとき以降は転入超過の傾向になっており、結婚後の子育て世代、または働き世代の転入が多いことを示しています。

#### ②女性

- 女性における年齢階級別の人口移動の特徴は、男性の場合と同様、10 歳～14 歳から 15 歳～19 歳になるときから 25 歳～29 歳から 30 歳～34 歳になるときにかけて、転出超過となることです。これらの傾向も男性と同様に、高校や大学への進学や、卒業後の就職等に伴う転出によるものと考えられます。また、20 歳～24 歳から 25 歳～29 歳になるとき、及び 30 歳～34 歳から 35 歳～39 歳になるときにかけての転出者数が男性と比較して多い原因として、結婚や雇用等の要因が考えられます。一方、30 歳～34 歳から 35 歳～39 歳になるとき以降は転入超過になっており、男性同様、結婚後の子育て世代の転入が多いことが考えられます。

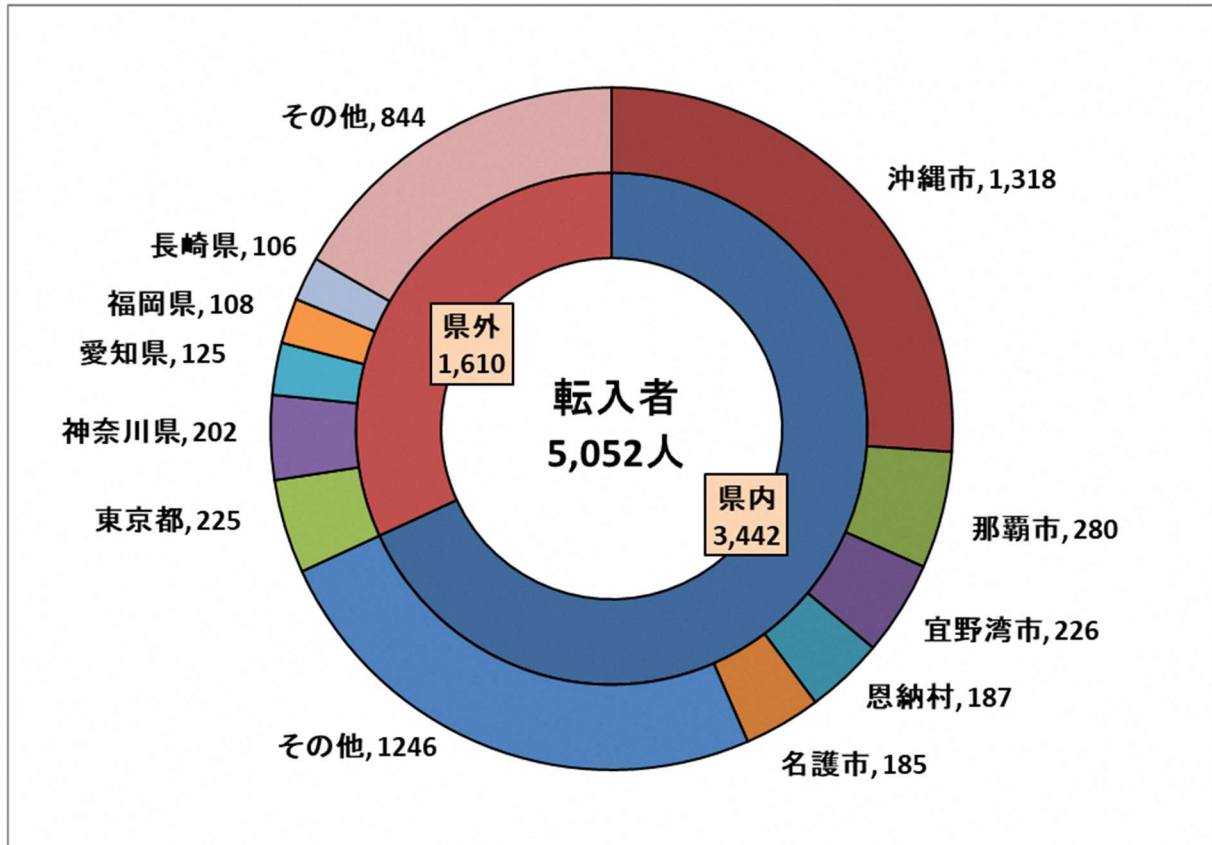


## オ. 県内市町村、県外への人口移動状況

県内の他地域及び、県外への転入出の状況を分析することによって、近年の本市の人口移動の状況を把握します。

### ◆県内市町村、県外からの転入状況（平成 30 年）

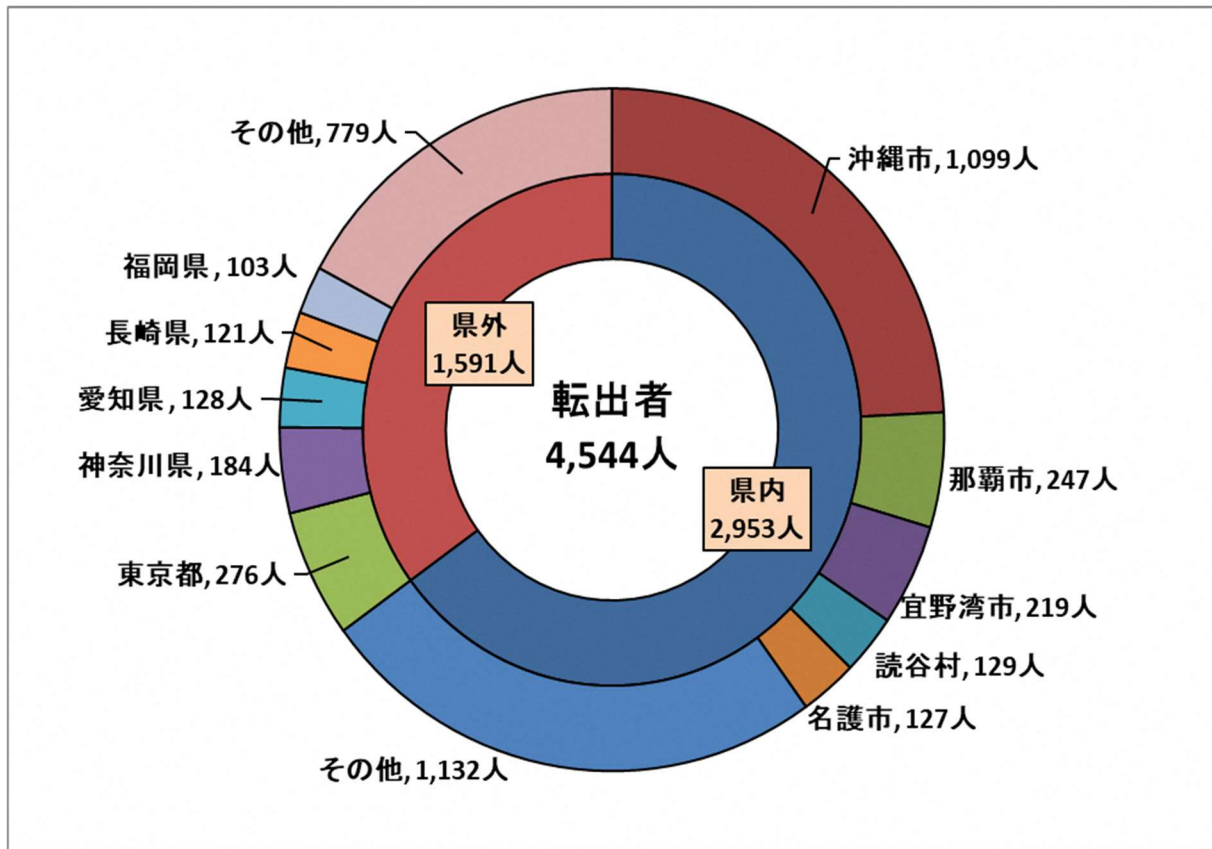
資料：総務省「住民基本台帳人口移動報告」



- 平成 30 (2018) 年度の住民基本台帳人口移動報告による県内外からの転入者の内訳を見ると、転入者の前住所地は県内が 3,442 人で 75% を占め、県外が 1,610 人で 35% となっており、転入者の前住所地の多くが県内で占められています。
- 県内で最も多いのは沖縄市で 1,318 人となっており、全体の 3 割弱を占めています。これは、本市と隣接しており、就職や就学等、多くの面で関係性が強いことから、転入者が多くなっているものと推測されます。次いで那覇市、宜野湾市、恩納村、名護市の順となっています。これらは、就業地の変更や大学等の卒業に伴うものと推測されます。
- 県外では、東京都の 225 人が最も多く、次いで神奈川県、愛知県、福岡県、長崎県と続いています。東京都や神奈川県、愛知県等からの転入が多いのは、本市から出稼ぎに出て行った人が戻ってきたことが考えられます。また、長崎からの転入が多いのは、市内自衛隊基地の関係者による転入の影響によるものと推測されます。

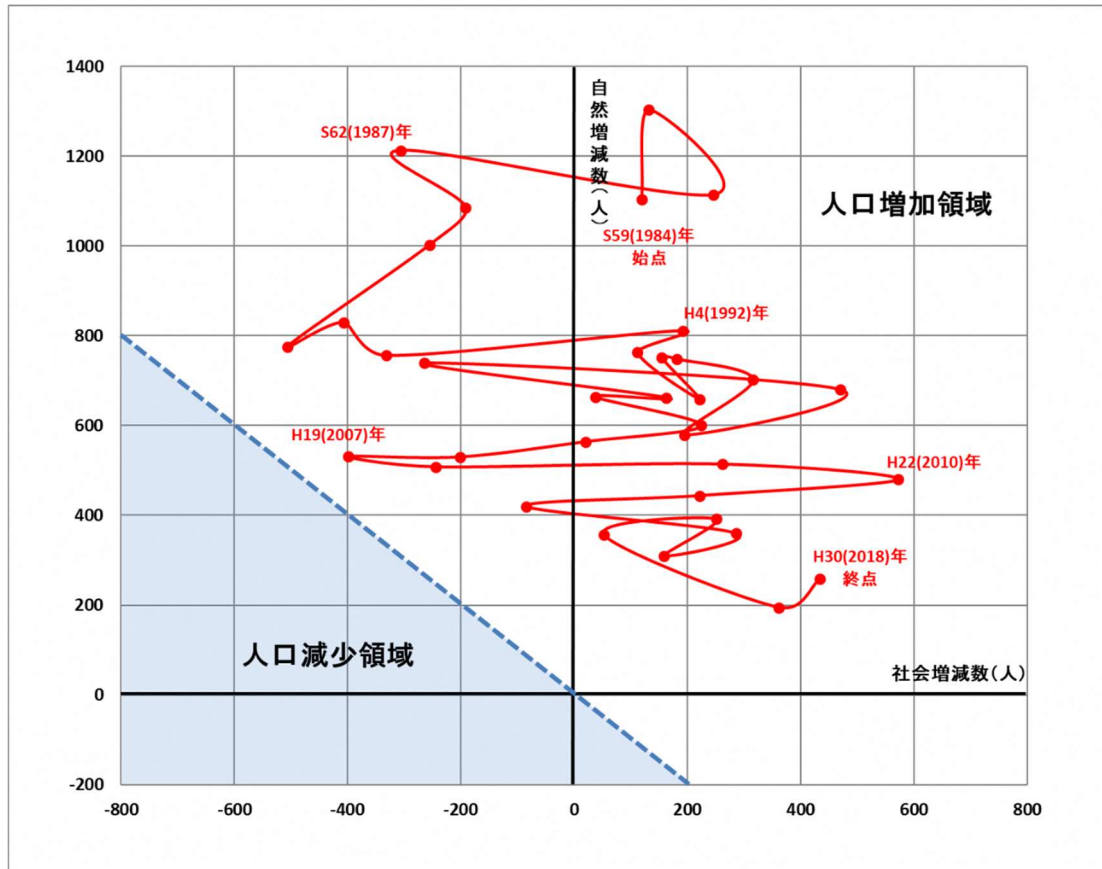
## ◆県内市町村、県外への転出状況（平成30年）

資料：総務省「住民基本台帳人口移動報告」



- 平成30（2018）年度の住民基本台帳人口移動報告による転出者の内訳を見ると、転出先は県内が2,953人で65%を占め、県外は1,591人で35%となっています。
- 県内で最も多いのは、沖縄市で1,099人と全体の4分の1余りを占めています。これは、転入者と同様に、本市とは隣接しており、就職や就学等、多くの面で関係性が強いことから、転出者も多くなっているものと推測されます。次いで那覇市、宜野湾市、読谷村、名護市の順となっており、企業や大学機関が立地する市への転出が多いことから、就業や大学への入学等に伴うものと推測されます。
- 県外では、東京都の276人が最も多く、次いで神奈川県、愛知県、長崎県、福岡県と続いています。東京都や神奈川県、愛知県への転出が多いのは、主に製造業などの出稼ぎ労働に出て行ったことによるものと考えられます。

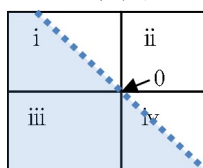
## カ. 総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響



本市の出生数・死亡数と、転入数・転出数のデータをもとに、総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響を分析します。

### ◆総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響（平成 30 年） 資料：沖縄県「人口移動報告」

(注) グラフの位置関係については以下のとおりである。



- i : 自然動態プラス、社会動態マイナスの状態を表すエリア
- ii : 自然動態プラス、社会動態プラスの状態を表すエリア
- iii : 自然動態マイナス、社会動態マイナスの状態を表すエリア
- iv : 自然動態マイナス、社会動態プラスの状態を表すエリア
- 破線：人口均衡ライン

- このグラフは縦軸が出生数から死亡数を差し引いた「自然増減数」、横軸が転入数から転出数を差し引いた「社会増減数」となっており、各年の数値を合算して示したものです。左下の網掛けされた部分は人口が減少となる領域を示します。
- このグラフから、本市では昭和 59 年（1984 年）以降、社会移動については、社会情勢、特に経済的要因が関係しているものと考えられますが、年度間で増減を繰り返しつつも、自然増減数が一貫して自然増となっていたことから、本市全体としては人口が増加傾向にあった事を示しています。
- しかしながら、グラフの動きとしては年々、左下の減少領域に近づいて来ていることから、自然増も低下傾向にあり、出生率の低下による出生数の減少と、高齢者の増加による死亡数の増加が影響しているものと推測されます。



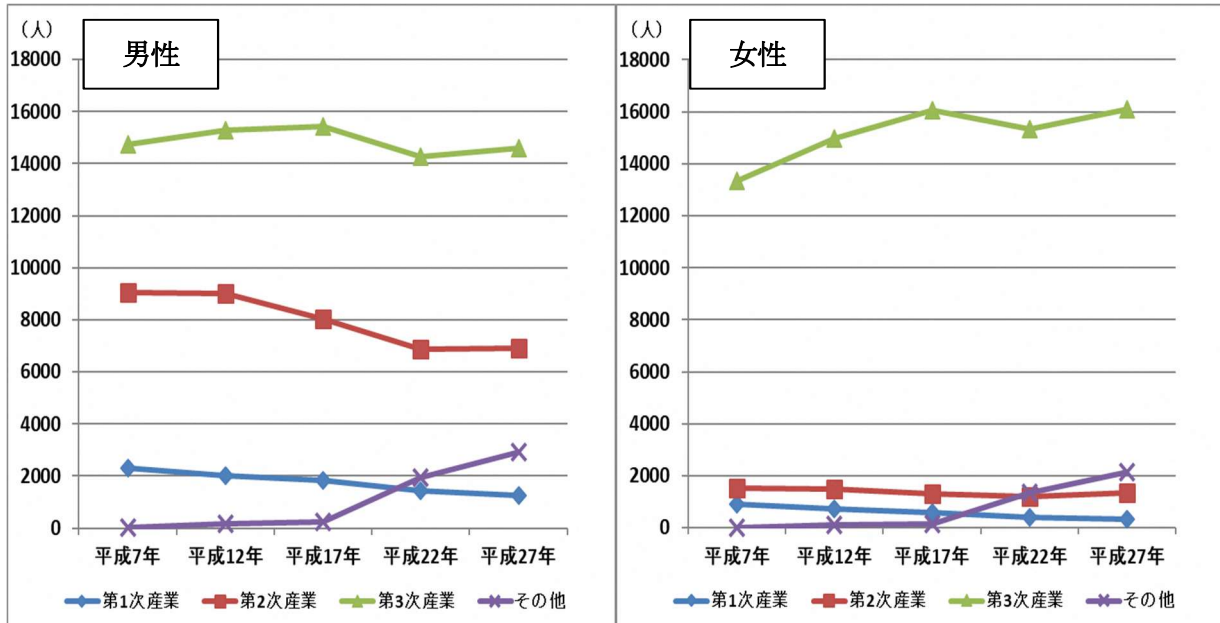
## (4)産業別就業人口

### ア. 男女別産業大分類別人口

国勢調査における男女別の産業人口の状況の推移から、本市の産業従事者の構造を分析します。

#### ◆産業別就業者数推移（平成 27 年）

資料：総務省「国勢調査」



#### ①男性

- 本市における男性の産業別就業者数は、サービス業である第3次産業が最も多く、全体の約5～6割を占めています。次いで製造業・建設業を中心とする第2次産業、農林水産業の第1次産業の順となっています。
- サービス業である第3次産業に従事する男性が最も多くなっている点は、近年における大型商業施設の進出や、情報通信産業の立地などが大きく影響しているものと推測されます。
- 平成12（2000）年から平成22（2010）年にかけて第2次産業の従事者が急激に減少している点は、この間における建設不況に伴うものと推測されます。しかし、平成27（2015）年は横ばいとなっており、建設不況が改善されていることがうかがえます。
- また、農林水産業の第1次産業の就業者数については、近年一貫して減少傾向にあり、従事者の高齢化と、若年者の就業が少ないことが要因となっているものと推測されます。
- なお、第1次から第3次産業までに分類されないその他の従事者が平成17（2005）年から平成27（2015）年にかけて、急激に伸びていますが、これは、国勢調査の職業欄の未記入が増えたことによるものと推測され、全国的に同様な傾向が見られます。

## ②女性

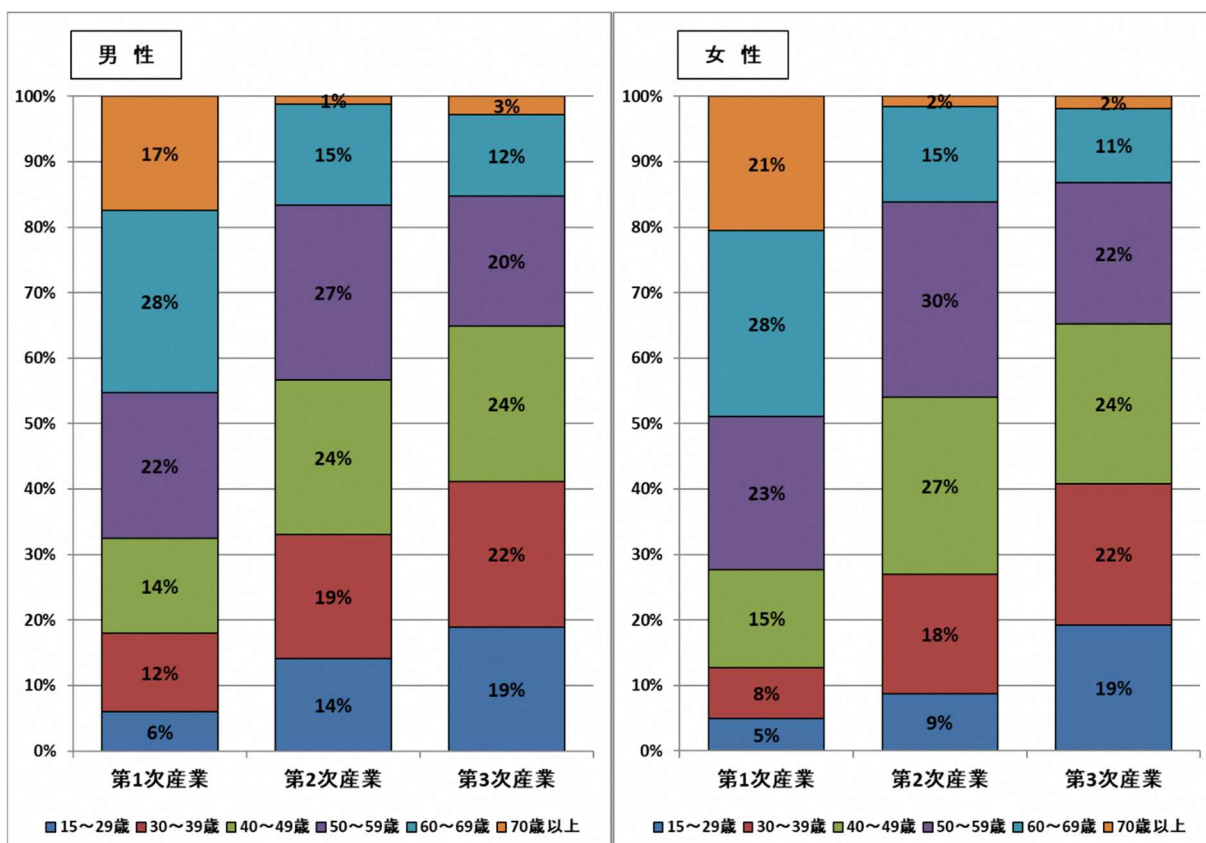
- ・ 本市における女性の産業別就業者数は、サービス業である第3次産業が全体の約8～9割を占め、次いで製造業・建設業を中心とする第2次産業、農林水産業の第1次産業の順となっています。
- ・ 就業者の推移を見ると、第3次産業の就業者数は伸びていますが、第2次産業や第1次産業は一貫して減少傾向にあります。
- ・ なお、第1次から第3次産業までに分類されないその他の従事者が平成17（2005）年から平成27（2015）年にかけて、急激に伸びていますが、これは、男性と同様に国勢調査の職業欄の未記入が増えたことによるものと推測され、全国的に同様な傾向が見られます。

## イ. 年齢別産業大分類別人口

年齢別の階級人口を、第1次産業・第2次産業・第3次産業という大きな分類で分析します。

### ◆年齢階級別（大分類）産業人口の割合（平成27年）

資料：総務省「国勢調査」



#### ①男性

- 各産業の男性の年齢階級別産業人口の割合を見ると、まず農林水産業の第1次産業では60歳以上の割合が45%と、高齢者の割合が非常に高く、また39歳以下の世代の割合が合計でも18%程度となっており、高齢化が顕著なことが明確になっています。このことから、全国的な傾向と同じく、本市においても畜産業を含む農業や漁業での若い世代の人材が不足していることがうかがえます。
- 次に、製造業・建設業を中心とする第2次産業では40歳代未満の割合が33%となっていますが、40歳～49歳の世代、50歳～59歳の世代もそれぞれ24%、27%となっており、第2次産業では比較的各世代が均等に従事していることから、第2次産業が世代を問わず就業できる可能性が高い産業分野であることがうかがえます。
- また、40歳未満の割合がサービス業である第3次産業では41%と高くなっており、若い世代の割合が高いことから、近年のIT関連産業などの新しい形態のサービス産業の立地に伴い増えているのではと推測されます。

## ②女性

- ・ 女性の場合も農林水産業である第1産業に従事する者は少ないものの、男性と同じく高齢者の割合が高く、高齢化が顕著となっています。
- ・ 女性においても、製造業・建設業を中心とする第2次産業や、サービス産業である第3次産業では、男性と同じく比較的若い世代の割合が高いことが分かります。ただし、女性の場合、前項で示したとおり、全就業者数の約8～9割が第3次産業で占められており、若い女性のほとんどが第3次産業に従事していると言えます。

## 2-2 将来人口の推計と分析

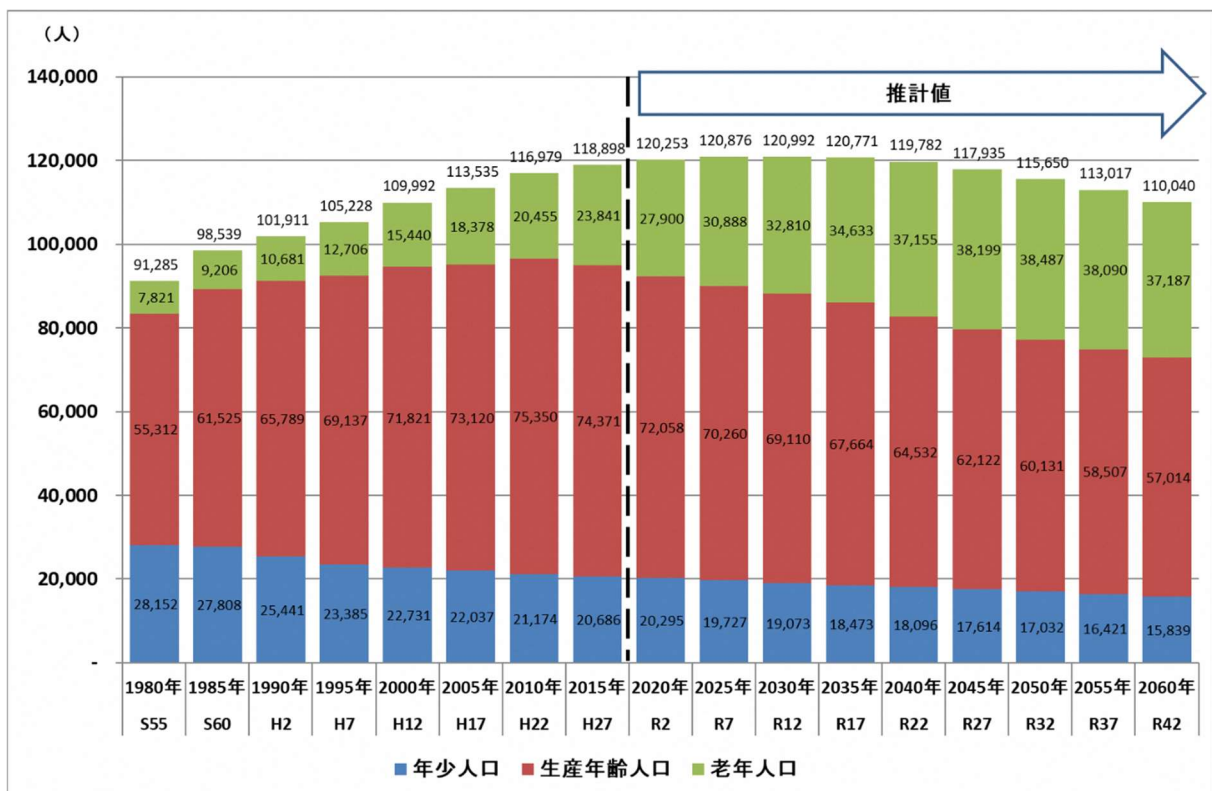
### (1) 社人研の推計による結果

#### ア. 将来人口推計

国の研究機関である国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）による「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」を活用し、市全体及び地区別の将来の人口推計について分析します。

#### ◆総人口及び年齢3区分別の推移

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



(注1) 年齢不詳者の取扱は、厚労省「国勢調査の実績人口データに基づく推計」のデータの補正方法に基づき、年齢不詳者を按分処理しているため、人口の現状分析における実績値と合致しない。

- 社人研の推計による、本市の令和47（2065）年までの人口推移を見ると、総人口は令和2（2020）年頃までは順調な増加傾向を示していますが、その後は増加の度合いが鈍くなり、停滞時期に入ります。そして、現在から約10年後の令和12（2030）年頃をピークとして、以降は減少に転じ、令和22（2040）年からは明らかな人口減少期に入って行きます。そして、推計の最終年である令和42（2060）年頃には、現在の9割程度となる11万人程度までに減少すると推測されています。
- 次に、年齢3区分別の推移を見ると、15歳から64歳までの生産年齢人口は、すでに平成22（2010）年をピークとし、以降は減少段階に入っており、今後も減少していくものと推計されています。

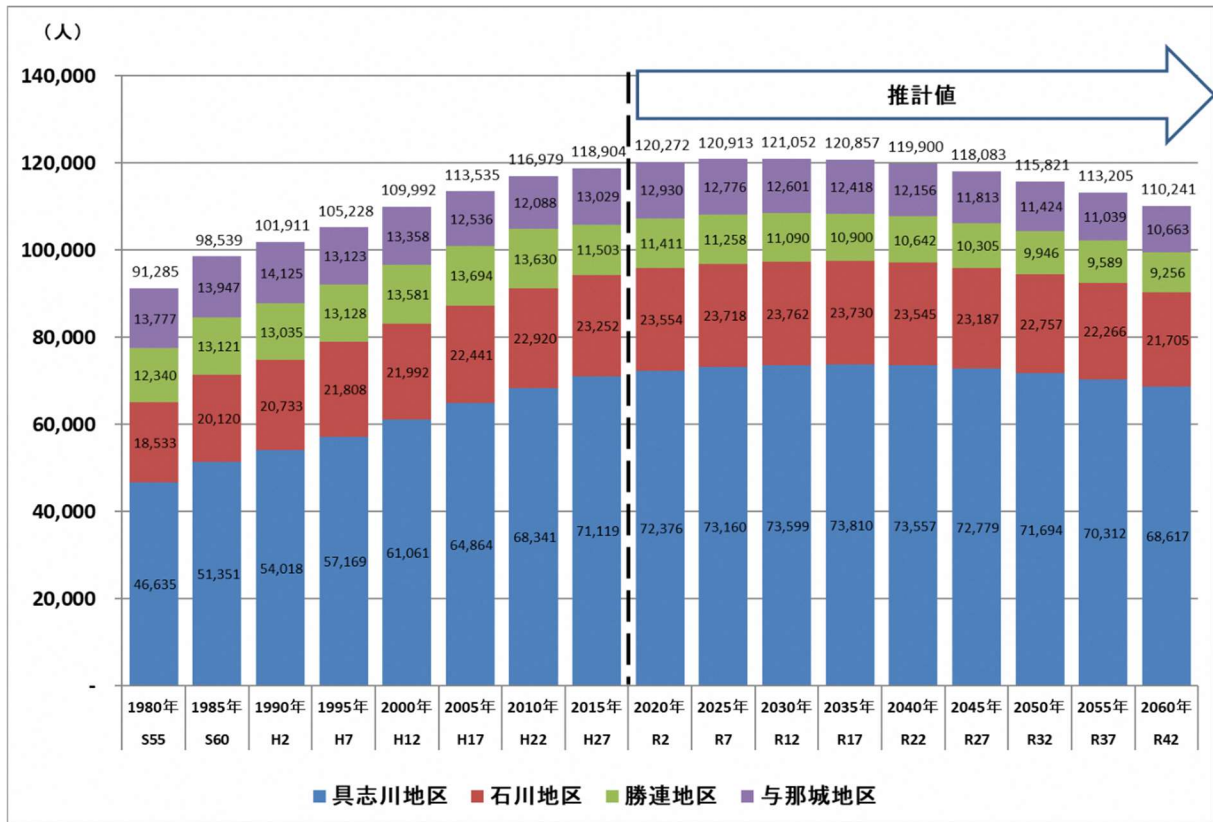
これは、将来の生産年齢人口を担うことになる、14歳までの年少人口の著しい減少が要因となっていることから、市外からの同世代の大量転入等の特別な事情がない限り、人口減少は確実に到来するものと考えられます。

- ・ 年少人口は、昭和 60（1985）年頃から一貫して減少傾向にあり、本市でも平成 22（2010）年頃には、65 歳以上の老年人口と逆転し、さらに推計の最終年である令和 42（2060）年頃には、現在の 8 割程度、昭和 55（1980）年からすると、ほぼ半減となる 1 万 6 千人弱まで減少すると推計されています。
- ・ 65 歳以上の老年人口は、昭和 55（1980）年から一貫して増加傾向にあり、平成 17（2010）年を過ぎたあたりから年少人口を上回っています。その後、令和 32（2050）年頃にピークを迎え、昭和 55（1980）年と比較すると約 5 倍にも増加するものと推計されています。このことから、本市でも超高齢化社会の到来と、それに備えた社会基盤の準備・整備が急務になってくるものと考えられます。
- ・ なお、日本全体では、すでに前回の国勢調査年である平成 22（2010）年には、総人口の減少化傾向が現れていますが、本市では、もう少し先になる見込みとなっているのは、全国平均より比較的高い合計特殊出生率などが寄与しているものと推測されます。

(注) 社人研の推計については、出生・死亡に関しては、主に平成 22（2010）年～平成 27（2015）年の人口の動向を勘案し、移動率に関しても最近の傾向が続くものと仮定して推計されています。

## ◆地区別総人口の推移

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



(注1)年齢不詳者の取扱は、厚労省「国勢調査の実績人口データに基づく推計」のデータの補正方法に基づき、年齢不詳者を按分処理しているため、人口動向分析・社人研の推計における市全体の実績値と合致しない。

- ・ 地区別の令和42(2060)年までの人口推移を見ると、最も人口の多い具志川地区においては、市全体の推計と同様に、平成22(2010)年頃までは増加傾向を示していますが、その後、増加の度合いが鈍くなり、若干遅めではあるが、令和22(2040)年頃からやはり減少期となり、令和42(2060)年頃には、平成27(2015)年と比較して2,500人程度の減少となります。
- ・ 石川地区の人口推移については、当面の間は微増傾向を示していますが、令和12(2030)年頃からは緩やかな減少になっていき、令和42(2060)年頃には、平成27(2015)年と比較して1,500人程度の減少となります。
- ・ 勝連地区の人口推移は、平成17(2005)年をピークに、以降緩やかな減少を続け、令和42(2060)年頃には、平成27(2015)年と比較して2,200人程度の減少となります。
- ・ 与那城地区の人口推移は、平成2(1990)年からの減少傾向が今後も続き、令和42(2060)年頃には、平成27(2015)年と比較して2,400人程度の減少となります。なお、与那城地区が比較的人口減少期が早めに訪れている点については、人口減少が顕著な島しょ地域を多く抱えていることが大きな要因になっているものと推測されます。

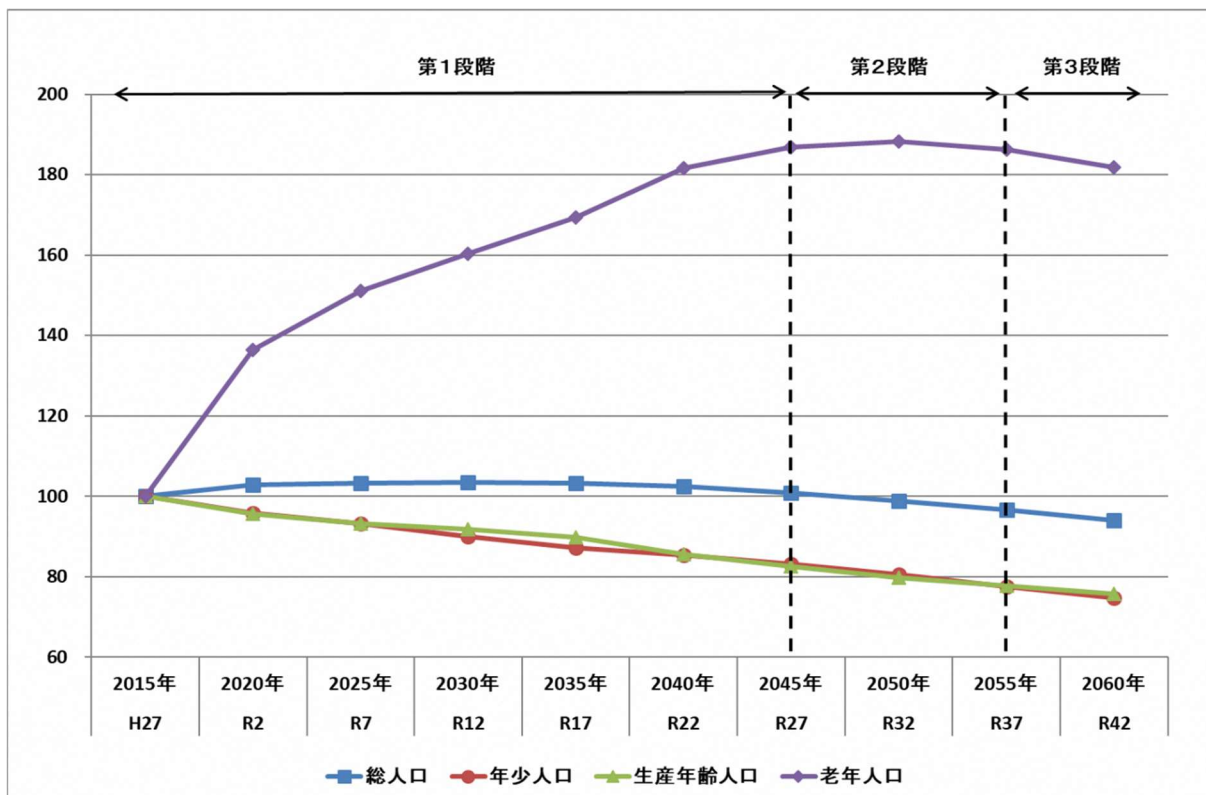


## イ. 人口減少段階の分析

社人研による「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」を活用し、本市の将来の人口減少段階について分析します。

### ◆人口減少段階の分析

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



- 社人研の推計によると、平成27（2015）年の人口を100とした場合の老年人口の指標は、令和27（2045）年を境に維持・微減の段階に入り、令和37（2055）年から減少段階に入ることから、市の人口減少段階は次表のとおりとなり、令和27（2045）年までは「第1段階」、令和27（2045）年から令和37（2055）年までは「第2段階」、それ以降は「第3段階」に入ると推測されます。このことは、本市では、今後、高齢化が急速に進むとともに、生産年齢人口や年少人口が継続的に減少していることから、介護医療費など社会負担が大幅に増えることに反し、費用を負担する世代は減少するといった状況が生じ、行財政の運営上非常に厳しい時代が到来することを示唆しています。特に、令和37（2055）年以降は市の人口を支えてきた老年人口の減少に伴い市全体の人口減少が進みます。

人口減少段階	分類	平成27 (2015)年	令和27 (2045)年	平成27年を100とした 場合の令和27年の指数
1 → 2	老年人口	23,841	38,199	188
	生産年齢人口	74,371	62,122	82
	年少人口	20,686	17,614	83



人口減少段階	分類	令和27 (2045)年	令和37 (2055)年	平成27年を100とした 場合の令和37年の指数
2 → 3	老年人口	38,199	38,090	186
	生産年齢人口	62,122	58,507	78
	年少人口	17,614	16,421	78

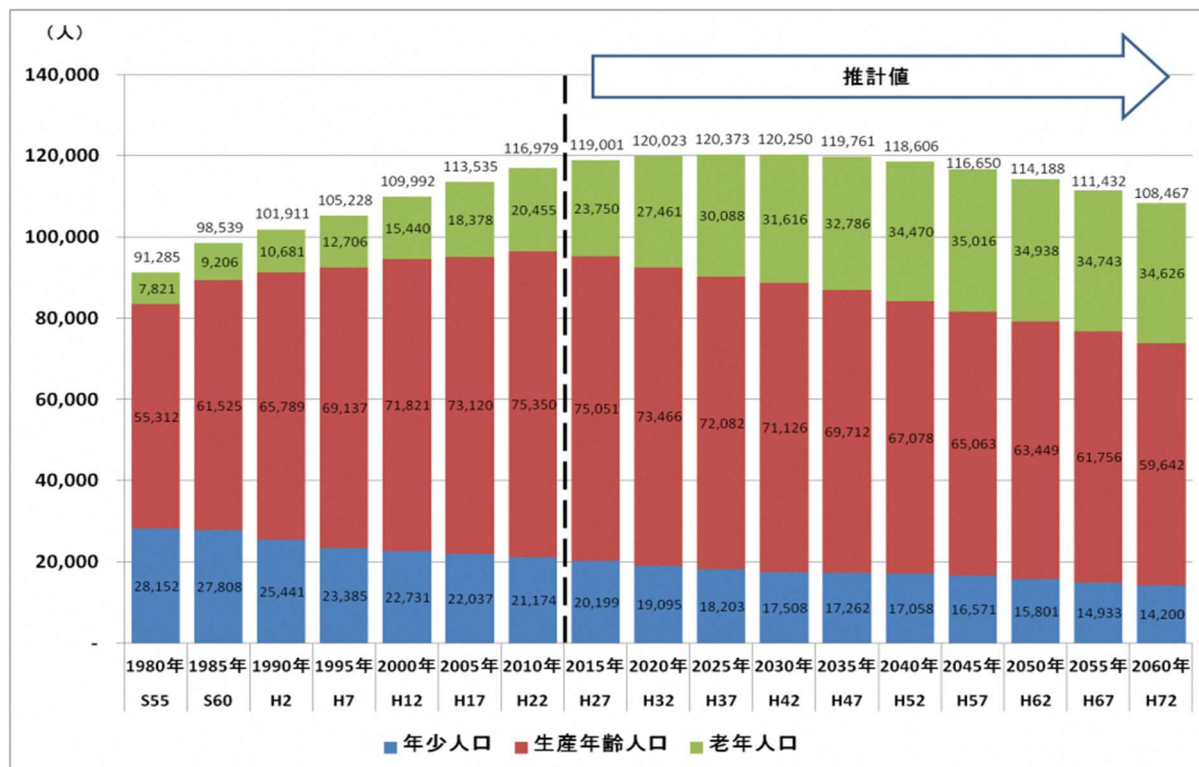
(注1)人口減少段階については、「第1段階：老年人口の増加（総人口の減少）」「第2段階：老年人口の維持・微減」  
「第3段階：老年人口の減少」の3つの段階を経て進行するとされている。

(注2)平成27（2015）年の人口を100とし、各年の人口を指数化した。

## ウ. 前回の人口ビジョンとの比較

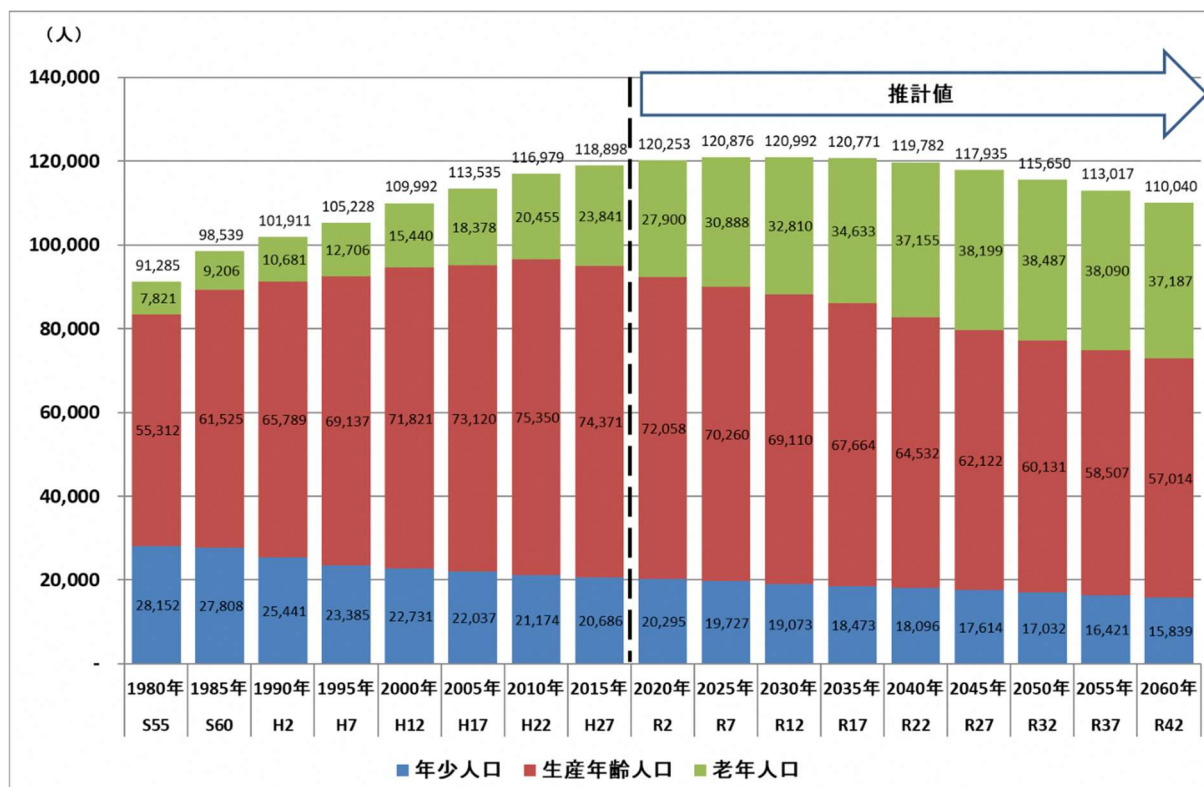
### ◆総人口及び年齢3区分別の推移

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」



### ◆総人口及び年齢3区分別の推移

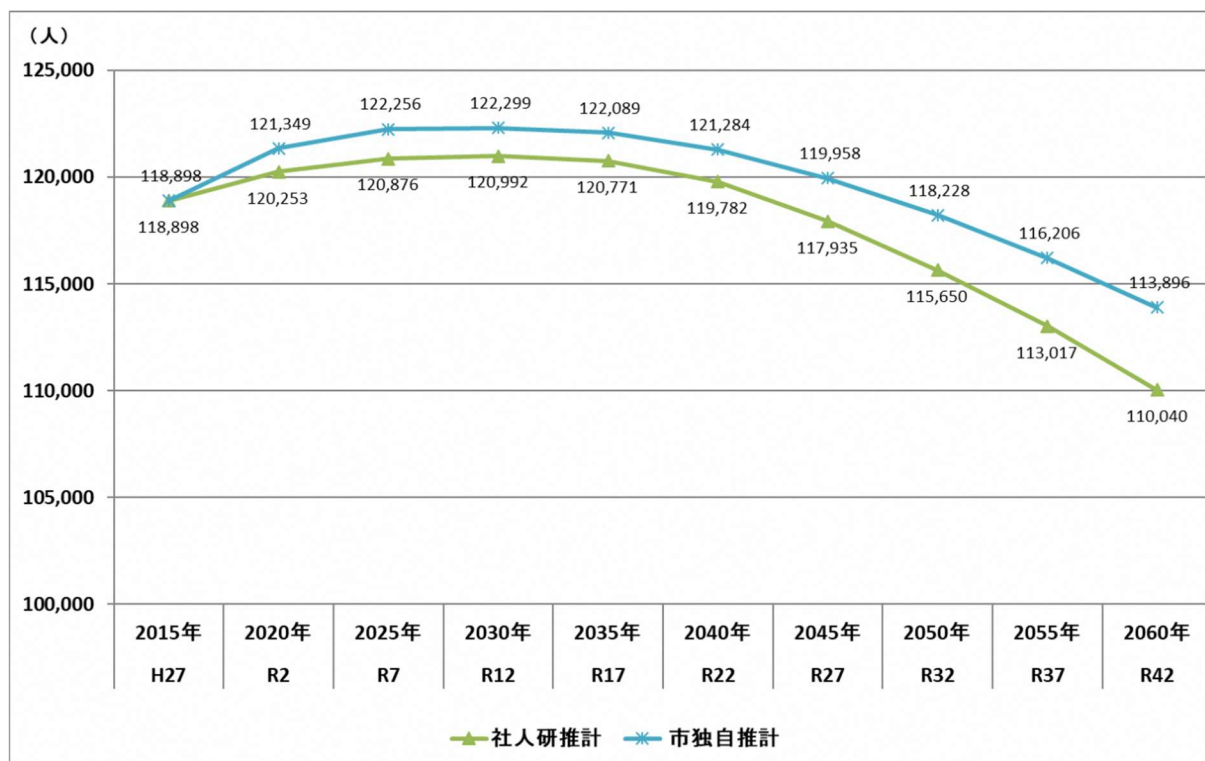
資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



- 平成 25 年の社人研の推計によると、総人口は 2025 年をピークに減少に転じ、2035 年からは明らかな人口減少期に入っています。平成 30 年の社人研の推計では、ピークは 2030 年、明らかな人口減少期は、2040 年と後ろ倒しになっており、人口減少に対応した施策が成果を上げていると言えます。
- 人口増加の要因のうち、自然動態をみると、1989 年から 2018 年までの累計では 17,607 人の自然増加となっており、人口増加に寄与していると考えられます。しかし、出生数から死亡数を差し引いたいわゆる自然な状態における人口の増加をみると、1989 年に最大で 1,003 人あった差が、2017 年には 195 人の差まで縮まっており、少子高齢化が確実に進んでいることがうかがえます。
- 社会動態をみると、増減を繰り返しており、人口が増加傾向となっているのは、一貫して自然増加であったことが要因であると考えられます。
- このことから、人口減少への対応として、結婚・出産・子育てに関する施策の効果が大きいと考えられます。性別・年齢階級別の人口移動の状況をも、男女ともに 30 歳～34 歳から 35 歳～39 歳、35 歳～39 歳から 40 歳～44 歳になる時に、転入超過になっていることから子育て世代の転入が多いことが分かります。
- また、社会増加についても、2016 年の人口ビジョン策定以降では増加幅となっており、2018 年には増加幅も大きく拡大していることから、移住・定住施策も一定の効果を上げていると考えられます。しかし、性別・年齢階級別の人口移動の状況をみると、男女ともに、15 歳～19 歳から 20 歳～24 歳になる時に、大幅な転出超過となっており、2005→2010 年と比較すると 2010 年→2015 年の転出超過数は拡大しています。
- このことから、若い世代の働く場の確保と就業支援、特に高校・大学への進学で転出してしまった若者世代の U ターンを促進する対策が必要であると考えられます。

## (2)市独自の推計による結果

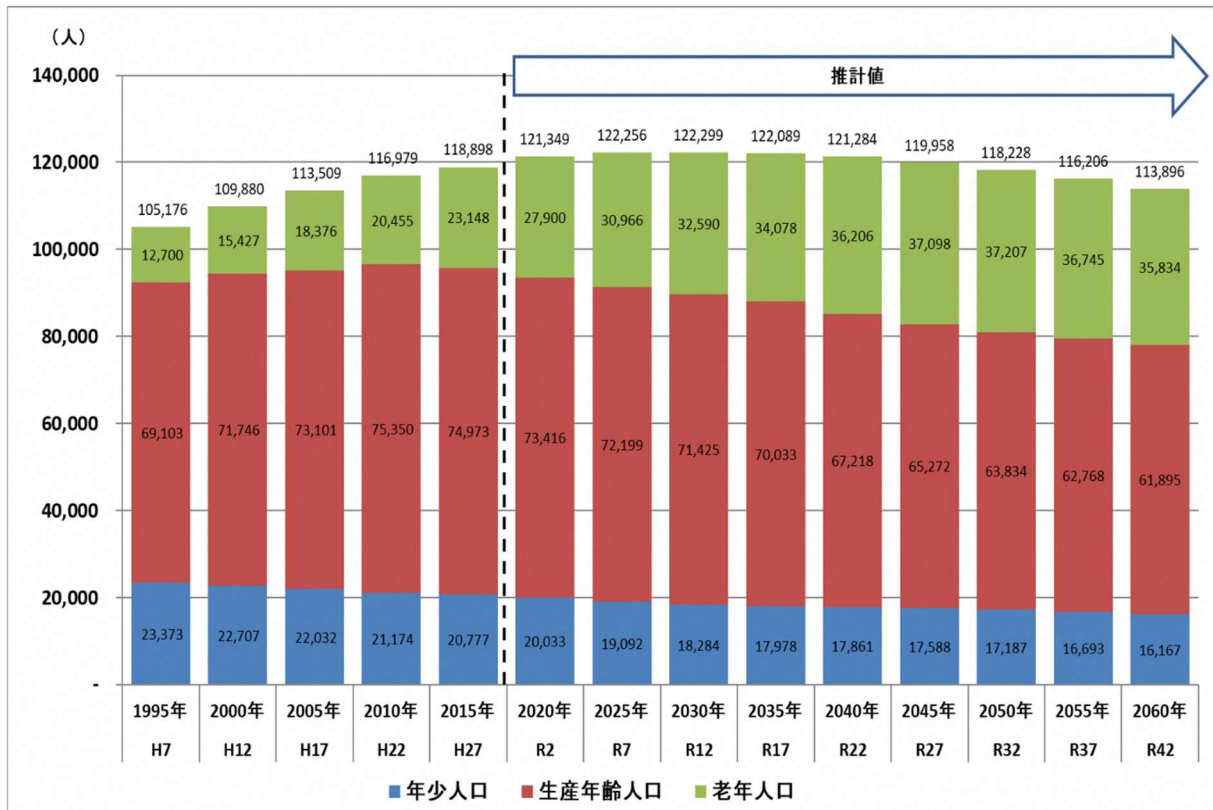
### ◆人口の推移



- ・ 市独自の推計によると、令和 12 (2030) 年をピークに人口は減少し始め、令和 42 (2060) 年には 113,896 人となる見込みです。
- ・ 市独自の推計では、社人研の推計値よりも令和 42 (2060) 年で 4,000 人程度多い結果となっています。この要因としては、市独自の推計では社人研の推計よりも、若い女性をはじめとした人口流出がそれ程進まないと仮定している事によるものです。
- ・ 市独自の推計と社人研との推計には人口の減り方に差はあるものの、令和 12 (2030) 年から令和 17 (2035) 年頃をピークにして、人口減少段階に入ることが予測されます。

(注)市独自の推計については、平成 27 年国勢調査人口を基準に、生存率、純移動率、女性 (15 歳～49 歳) の 5 歳階級別出生率、0 歳～4 歳性比に仮定値を設定し、コーホート要因法により推計した。生存率や 0 歳～4 歳性比については社人研の値を利用し、純移動率については 2035 年まで移動率が収束すると仮定して算出した。出生率については、社人研の値をもとに過去の実績を考慮して補正した値を利用した。

## ◆年齢3区分別の人口推移

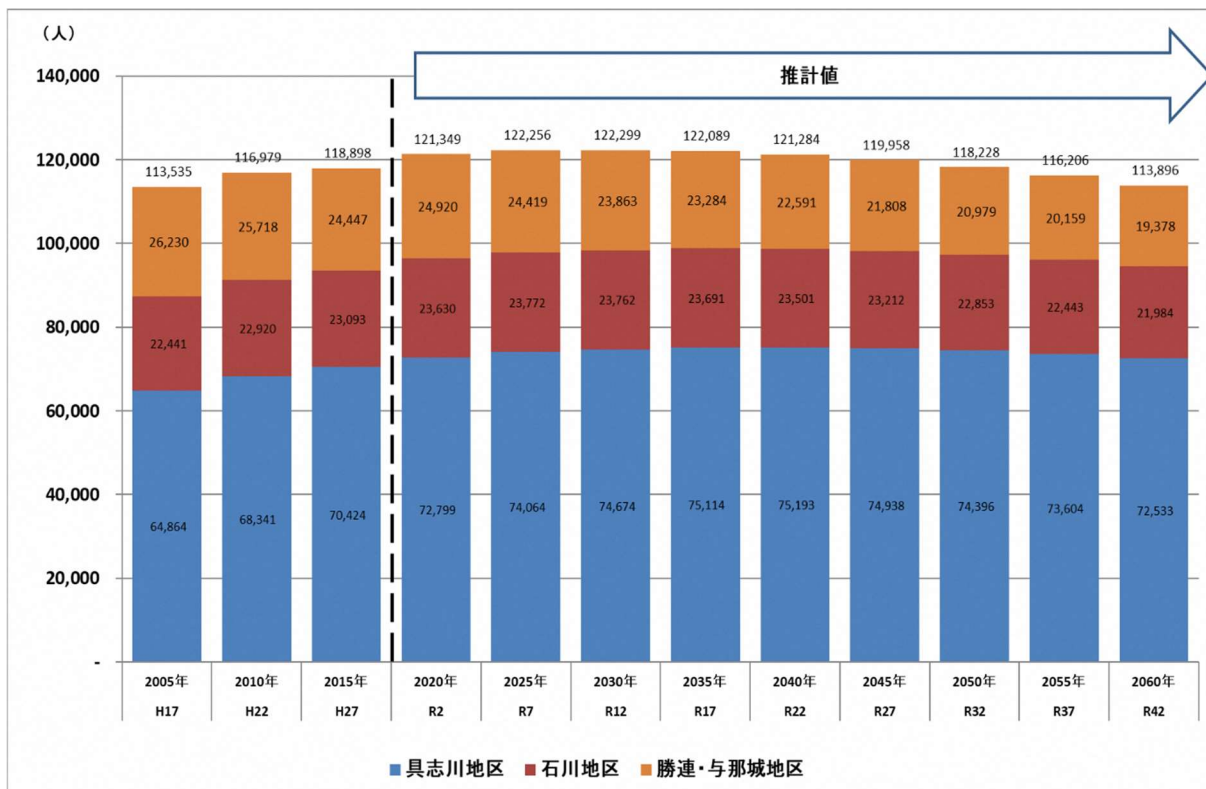


(注1)年齢不詳者の取扱は、厚労省「国勢調査の実績人口データに基づく推計」のデータの補正方法に基づき、年齢不詳者を按分処理しているため、人口の現状分析における実績値と合致しない。

- ・ 生産年齢人口については、平成 22 (2010) 年の 75,350 人をピークに以降は減少傾向となっています。平成 27 (2015) 年現在、市の総人口の 62.5%を占めていますが、令和 42 (2060) 年には 54.3%と総人口に占める割合が少なくなっています。
- ・ 年少人口については、今後増加することなく、減少の一途を示しており、平成 27 (2015) 年の 20,777 人から令和 42 (2060) 年には 16,167 人と、平成 27 (2015) 年に比べて 4,600 人程度減少する見込みとなっています。
- ・ 一方、老年人口は増加傾向を示し、平成 27 (2015) 年現在、市の総人口に占める割合は 20%弱ですが、令和 42 (2060) 年には 31.5%と、総人口の 3 分の 1 が老年人口となることが推測されます。年少人口と比べると、令和 42 (2060) 年には年少人口の約 2.2 倍となることから、典型的な少子高齢化社会であると言えます。

◆中学校区別総人口の推移(地区ごと)

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」

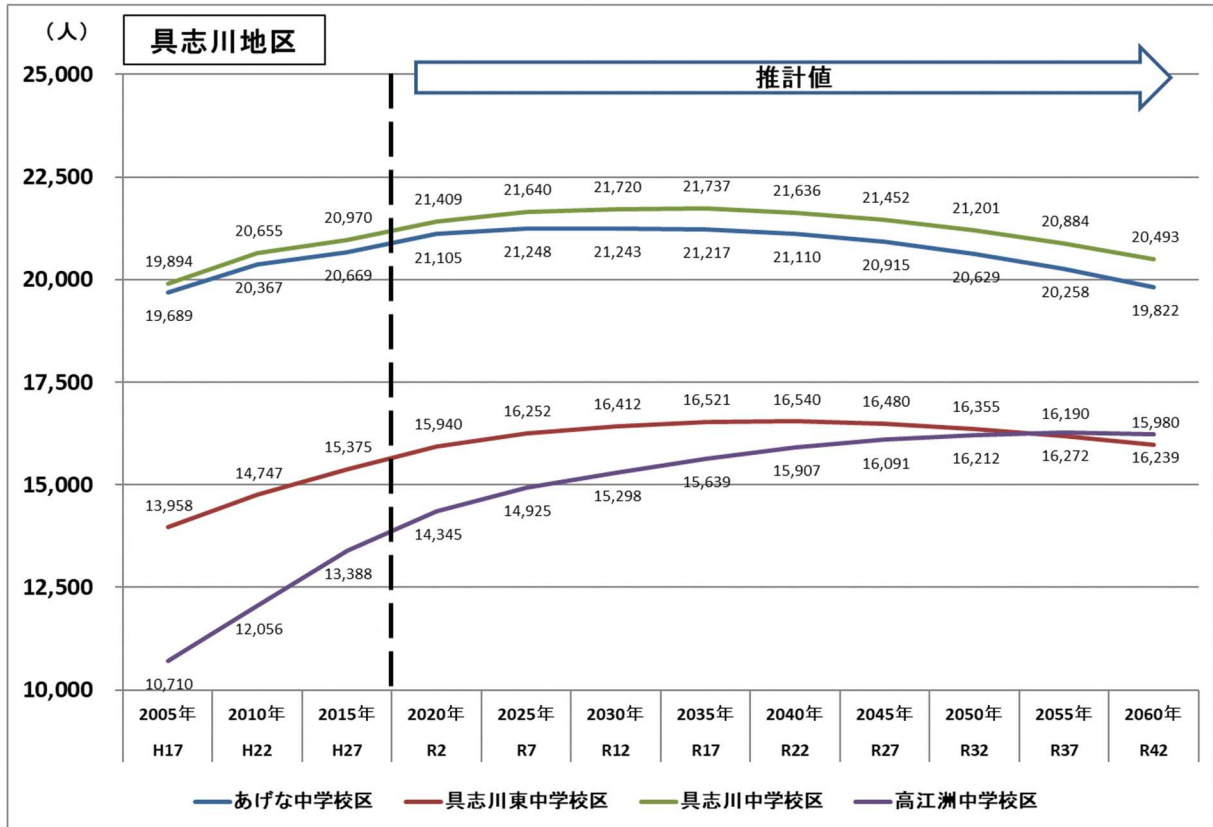


(注1) 各中学校区の人口は、住民基本台帳の各中学校区の比率を国勢調査に換算しているため、人口動向分析・社人研の推計における市全体の実績値と合致しない。

- 具志川地区は、人口のピークが令和22（2040）年と市全体のピークである令和12年（2030）の10年後となっています。平成27（2015）年現在70,424人である人口が令和22（2040）年には75,193人と約5,000人弱増加し、その後は緩やかに減少する見込みです。
- 石川地区は、人口のピークが令和7（2025）年と市全体よりも5年早く人口減少となる想定です。平成27（2015）年現在23,093人である人口が令和42（2060）年までに1,000人程度減少する見込みです。
- 勝連・与那城地区は平成17年から人口減少が続き、令和42（2060）年には平成27（2015）年現在と比べておよそ5,000人の人口減少が見込まれています。島しょ地域を抱える勝連・与那城地区は市全体の傾向とは大きく異なる傾向となっているため、独自の対策が必要です。

## ◆中学校区別総人口の推移(具志川地区)

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」

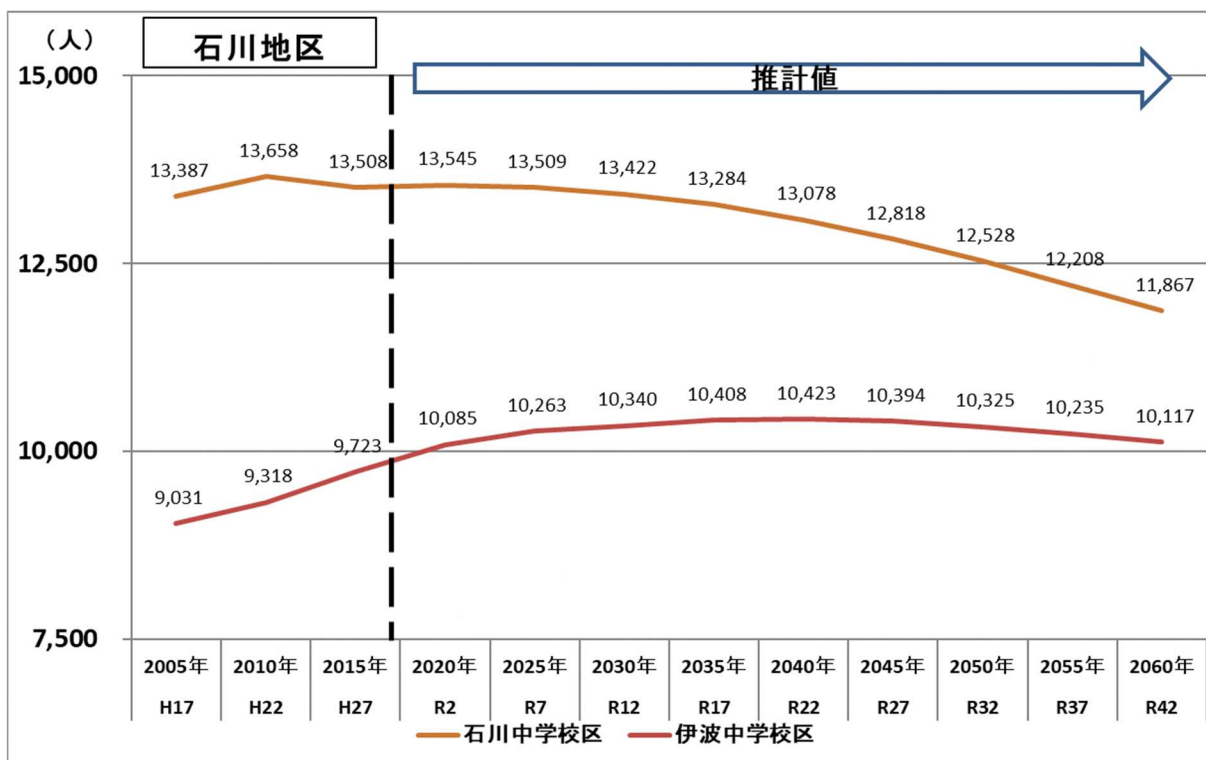


- ・ 人口増加が続く具志川地区のなかでも高江洲中学校区の増加幅が非常に大きく、市全体の人口増加の要因であると分かります。高江洲中学校区は平成27(2015)年現在と比べて令和42(2060)年には2,600人程度の増加が見込まれ、地区の中で唯一継続的な人口増加が想定されています。
- ・ 高江洲中学校区の人口増加の主な要因としては、県道33号線沿いの商業施設の立地により、その周辺の宅地開発が進み、比較的若い世代の転入・転居者の増加につながったと考えられます。
- ・ その他の中学校区は令和7(2025)年から令和17(2035)年の間にピークを迎え、その後は緩やかに減少していく、市全体の推計と類似した傾向が見られます。



◆中学校区別総人口の推移(石川地区)

資料：国立社会保障・人口問題研究所日本「地域別将来推計人口（平成 30 年 3 月推計）」

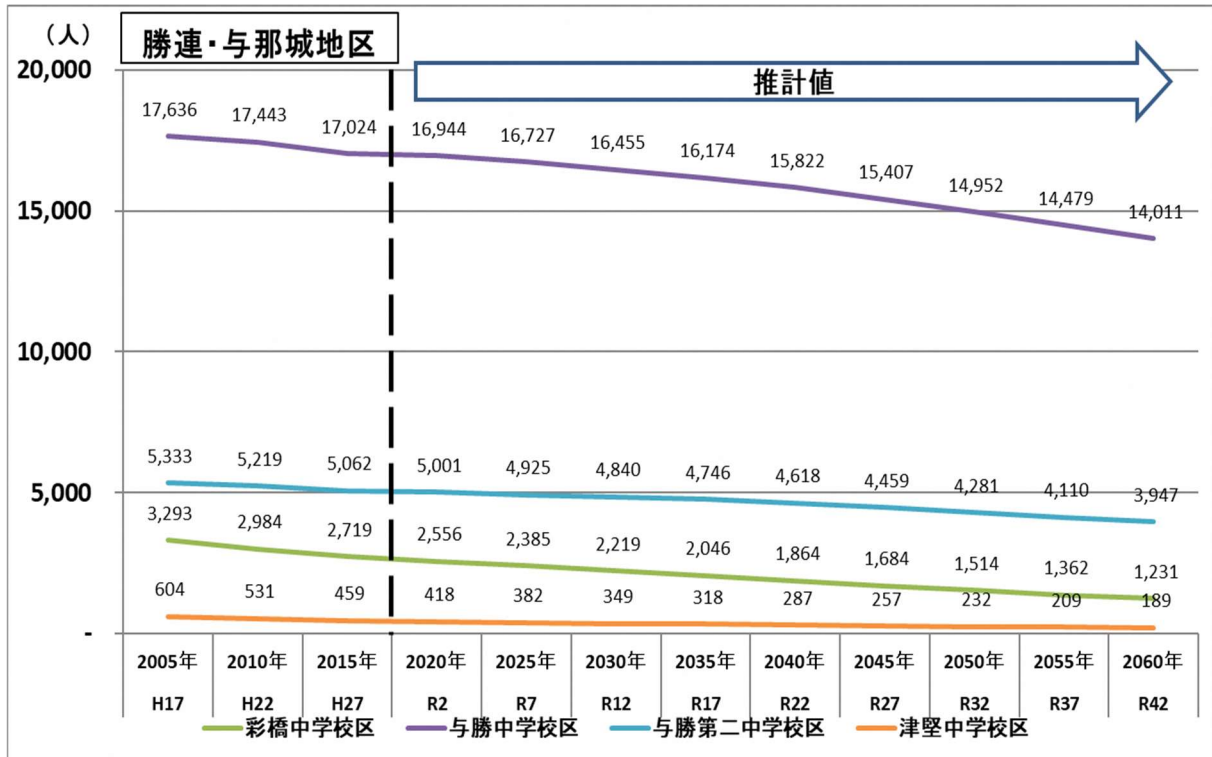


- ・ 石川地区は石川中学校区と伊波中学校区で大きく異なる傾向が見られます。石川中学校区は令和 2 (2020) 年をピークに人口減少期に入り、平成 27 (2015) 年現在と比較すると令和 42 (2060) 年は 1,700 人程度の人口減少が見込まれています。
- ・ 伊波中学校区は、令和 22 (2040) 年までは微増傾向であり、その後は緩やかに減少していくと想定されています。令和 42 (2060) 年には、平成 27 (2015) 年現在より 400 人程度の増加が見込まれています。人口のピークとなる令和 22 (2040) 年には平成 27 (2015) 年現在の人口から 7,000 人程度の増加が想定されています。
- ・ 伊波中学校区の人口増加の主な要因としては、国道 329 号線石川バイパスの開通による交通アクセスの向上や、戸建て・賃貸住宅の開発が進み、転入者が増加したものと考えられます。



## ◆中学校区別総人口の推移(勝連・与那城地区)

資料：国立社会保障・人口問題研究所日本「地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



- ・ 勝連・与那城地区は地区内全ての中学校区において人口減少傾向にあり、特に人口が最も多い与勝中学校区は大幅な人口減少が見込まれています。平成27(2015)年現在と比較して、令和42(2060)年には3,000人程度の人口が減少すると想定されています。
- ・ 与勝第二中学校区も同様に、人口減少が持続すると想定され、平成27(2015)年現在と比較して令和42(2060)年には1,000人程度の人口減少が見込まれています。
- ・ 彩橋中学校区は減少幅が大きく、平成27(2015)年現在と比較して令和42(2060)年には1,500人程度の減少が見込まれており、令和42(2060)年の人口は1,231人になると想定されています。これは、平成27(2015)年現在の人口の45%程であり、人口が半減する想定です。
- ・ 津堅中学校区は彩橋中学校区以上に減少幅が大きく、平成27(2015)年現在と比較して令和42(2060)年には270人程度の減少が見込まれており、令和42(2060)年の人口は189人と想定されています。これは平成27(2015)年現在の人口の41%程度にあたります。
- ・ 島しょ地域のみならず、すべての中学校区で人口が減少することに加え、島しょ地域の減少の速さに対しては早急に対策を講じる必要があります。

## 2-3 人口の変化が地域の将来に与える影響の分析・考察

### (1)人口減少の原因分析

これまでの分析で示したように、本市の人口は令和12(2030)年までは増加することが予測されています。しかし、この要因としては主に高齢者人口の増加によるものであり、年少人口は出生率の低下が見られることから、現段階においても減少傾向の様相を呈していると言えます。その結果、将来的には死亡数が出生数を上回り人口は減少していくものと推測されます。

市外からの転入や市外への転出といった社会移動に関する分析においては、10代後半から20代前半までの人口流出が顕著であるものの、その後、就職後や子育て時期に戻ってくる傾向があることや、過去の実績より若干の転入超過となっていることなどから、本市の人口増減には社会移動の影響はそれほど大きくはないことが分かりました。

このことから、本市の将来的な人口減少の大きな要因としては、出生率の低下による出生数の減少が挙げられ、さらに出生数の減少が子どもを産む世代の減少にもつながり、より出生数が減少するといった負のスパイラルが始まっています。よって、出生率の回復に向けた取り組みが本市の最重要課題であると考えられます。

### (2)人口の変化が地域の将来に与える影響と課題

前述しましたように、本市でも少子高齢化が進み将来的には人口が減少することが推測されています。中長期的に見ると、少子化は生産年齢人口の減少につながっていくため、生産活動の低下、消費活動の減退、地域経済の停滞などが懸念され、さらには税負担能力の低下による財政力の低下といった状態につながることが予測されます。

その一方で、高齢者の増加に伴い福祉サービスや医療に多額の財源が必要になります。特に、後期高齢者の増大により、医療・介護ニーズが高まり、扶助費の大幅な増加が予測されます。平成27(2015)年には65歳以上の高齢者1人あたり3.1人の生産年齢人口で支えていましたが、令和47(2065)年には高齢者1人あたり1.5人の生産年齢人口で支えることとなり、若い世代の負担増加も課題となっています。

また、本市においては、合併前からの既存公共施設に加え、合併後新たに設置した施設を含め数多くの施設があり、その多くは1970年代後半と2000年代前半の時期に集中的に整備されてきていることから、今後集中的な更新時期を2回迎えることとなります。さらに、施設だけではなく、道路や上下水道などのその他のインフラについても、今後老朽化が進むことから、その維持補修、更新費用も、将来への課題となっています。

このことは、社会保障費が増大する一方、生産年齢人口の減少による税収減が見込まれる厳しい財政環境の中、さらに公共施設の維持・改修・改築コストの大幅な増加に対応しつつ、持続可能な財政運営を維持していかななくてはならないという非常に困難な課題であります。この課題に対処していくためには、市民ニーズや人口構造の変化等、時代の変化に応じた横断的・総合的な視点での施策が必要となります。

### (3)市民意識から見た将来人口に及ぼす影響と課題

本市の将来人口に影響を及ぼす要因等を把握するため、結婚・出産・子育て・定住・移住等について、市民の方に意見を聞きました。その結果から、本市の将来人口に及ぼす影響と課題について整理すると次のとおりです。

※アンケート実施後に記載。

# 1 うるま人口ビジョン島しょ地域編改訂版の趣旨

## 1-1 背景と位置付け

本市は、沖縄本島側の市街地を中心とする地域と、本島側と架橋で結ばれた、平安座島、浜比嘉島、宮城島、伊計島、また、有人離島である津堅島を含めた島しょ地域で構成された地勢となっています。

島しょ地域については、うるま市人口ビジョン改訂版（以下「市ビジョン改訂版」という。）でも一部触れましたが、本島側の市街地とは対比的に近年一貫して年少人口が減少するとともに、急速に高齢化が進むなど少子高齢化が顕著になってきています。

年少人口の減少については、既に大きな影響が現れており、市では、苦渋の判断ではありましたが、児童・生徒の教育環境を確保する観点から、平成23年度に、津堅島を除く島しょ地域の小中学校の統廃合を行ったところです。

島しょ地域における人口減少の要因については、出生率の低下など、市全体の傾向に加え、道路、污水处理施設、通信などの生活基盤インフラ整備の遅れ、利便性を求める若年世代の都会志向、就業機会の不足など様々な要因が重なっているものと考えられます。

そこで、その傾向を各種統計データから読み取るとともに、今後の市の島しょ地域における施策に反映させることを目的として、うるま市人口ビジョン島しょ地域編改訂版を策定しました。

## 1-2 対象期間(令和2(2020)年～令和42(2060)年)

うるま市人口ビジョン島しょ地域編改訂版は、市ビジョン改訂版と同様に、短・中・長期における傾向を把握するため、令和42(2060)年までの人口推計などを行うものとし、最新の統計情報等を考慮し、必要に応じて5年ごとに見直すものとします。

なお、島しょ地域においては、その性質上、詳細な統計データなどの表示が困難なため、市の住民基本台帳データを中心に現状把握、推計を行うものとします。

## 2 人口の現状分析

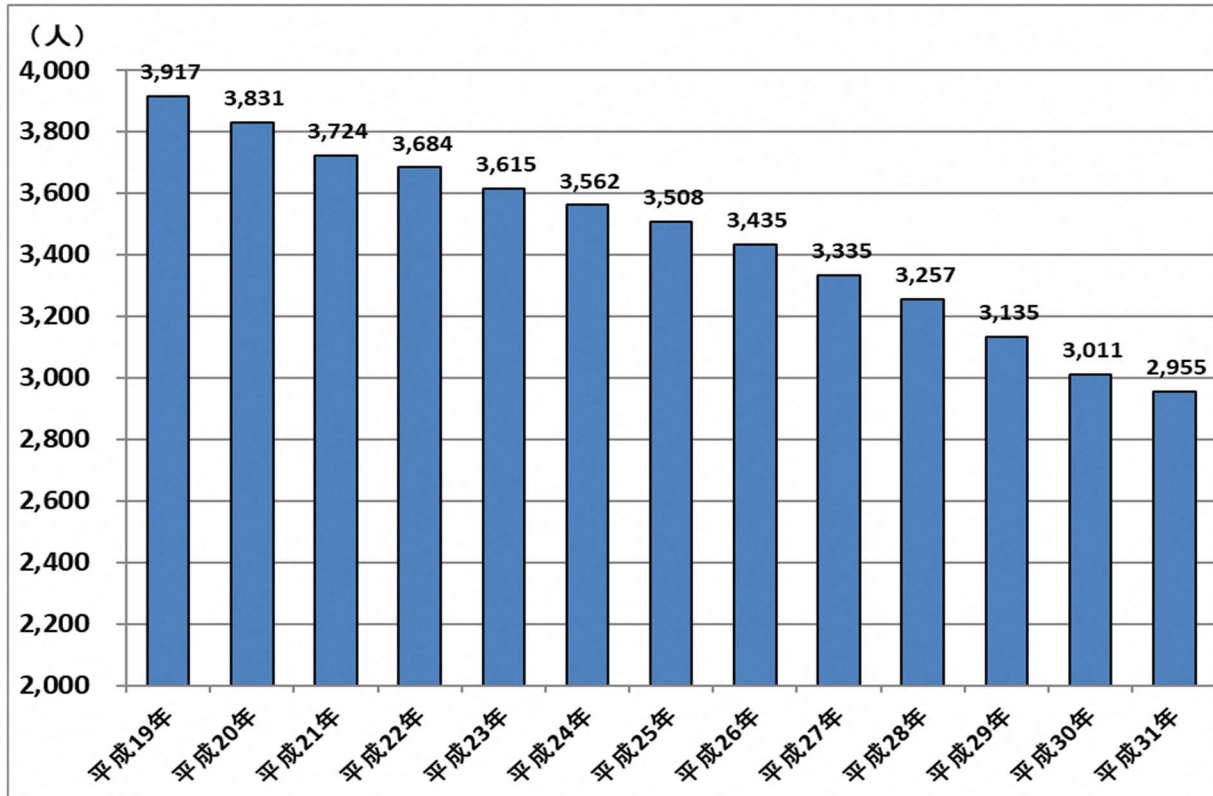
### 2-1 人口動向分析

#### (1)人口の推移

島しょ地域の近年の人口推移を、住民基本台帳の登録人口を基に分析します。

#### ◆島しょ地域の人口の推移

資料：市住民基本台帳



- ・ 島しょ地域の近年の人口推移を見ると、かなりの割合で人口が減少していることが一目瞭然となっています。実に平成19年(2007年)～平成30年(2018年)の間に1,000人程の人口が減少しており、約25%の減少率となっています。
- ・ その要因としましては、若年世代を中心とした市内市街地への転居や、その影響を受けての出生数の減少、また、高齢者の増加による死亡数の増加などが推測されます。

#### ◆島しょ地域各自治会の人口

島しょ地区	平成19年	平成31年
津堅	600	416
浜	355	254
比嘉	217	181
平安座	1,516	1,166
桃原	266	202
上原	296	234
宮城	203	156
池味	116	88
伊計	348	258
合計	3,917	2,955

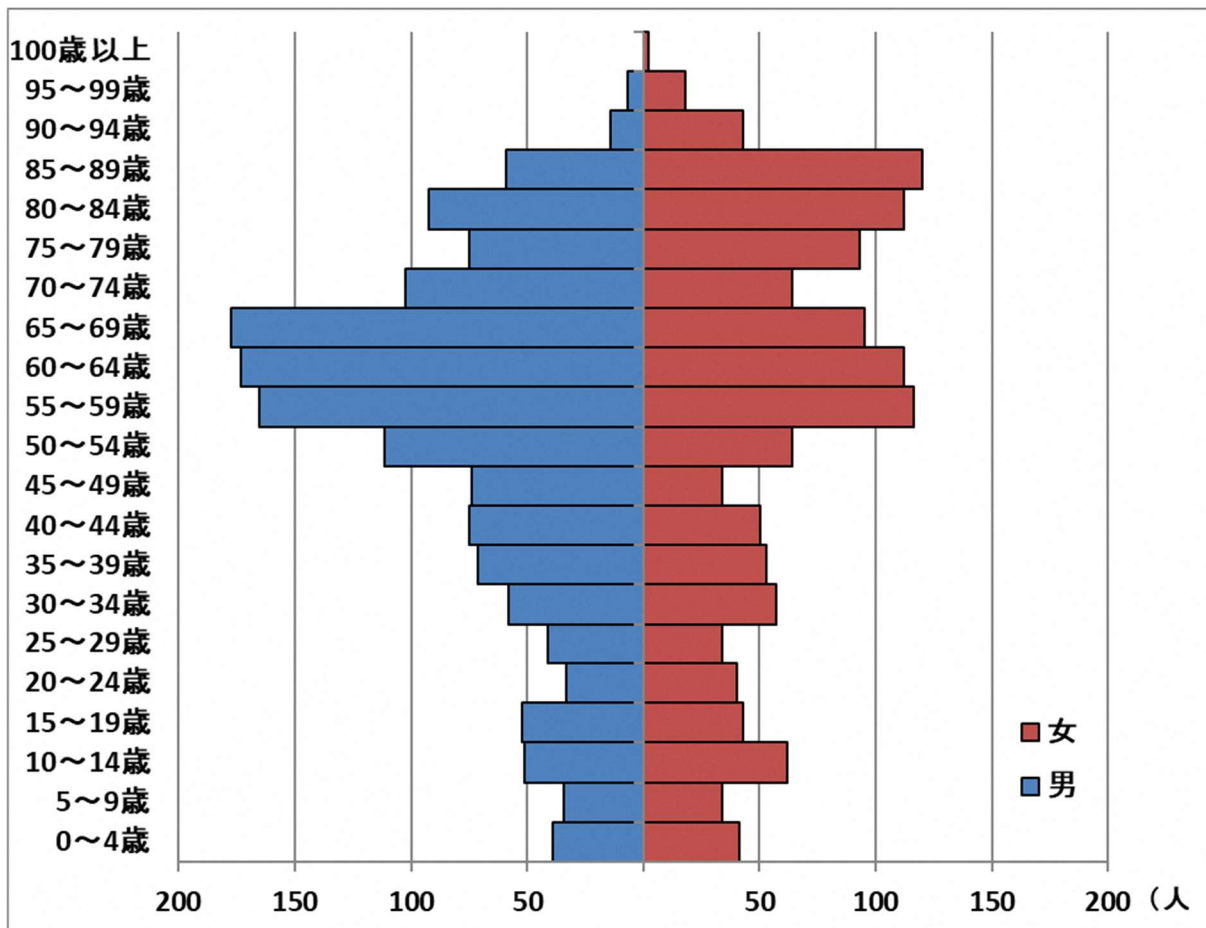
- ・ 島しょ地域各自治会の平成19(2007)年と平成27(2015)年の人口を比較して見ると、各自治会とも減少していることが分かります。特に津堅や浜、平安座では人口の減少が大きく、また比嘉、宮城や池味などでは全人口が200人を下回っている状況にあり、今後のコミュニティ機能の維持が課題となるものと考えられます。

## (2)年齢別人口構造

島しょ地域の男女年代別人口構成を、人口ピラミッドに示して分析します。

◆島しょ地域人口ピラミッド（2015年）

資料：総務省「国勢調査」



- ・ 島しょ地域の人口ピラミッドを見ると、年少人口が少なく、老年人口が多い、少子高齢化が進んだ「つぼ型」をしています。
- ・ 55～69歳の人口が最も多いのは、市全体の構造と同様に、終戦後の第一次ベビーブームによるものだと考えられます。
- ・ 市全体の構造では、いわゆる第二次ベビーブームに生まれた40～44歳の人数が多くなっていましたが、島しょ地域にはその特徴は見られません。このことから、島しょ地域では、第二次ベビーブームに生まれたはずの世代が他の地域へ流出してしまっていることが推測されます。
- ・ 年少人口の親世代が流出している影響で、必然的に年少人口の数も極端に少なくなっています。
- ・ このままの状態が10年程進むと、さらに少子高齢化が深刻化した「逆富士山型」の構造となり、人口減少が急速に進むものと推測されます。

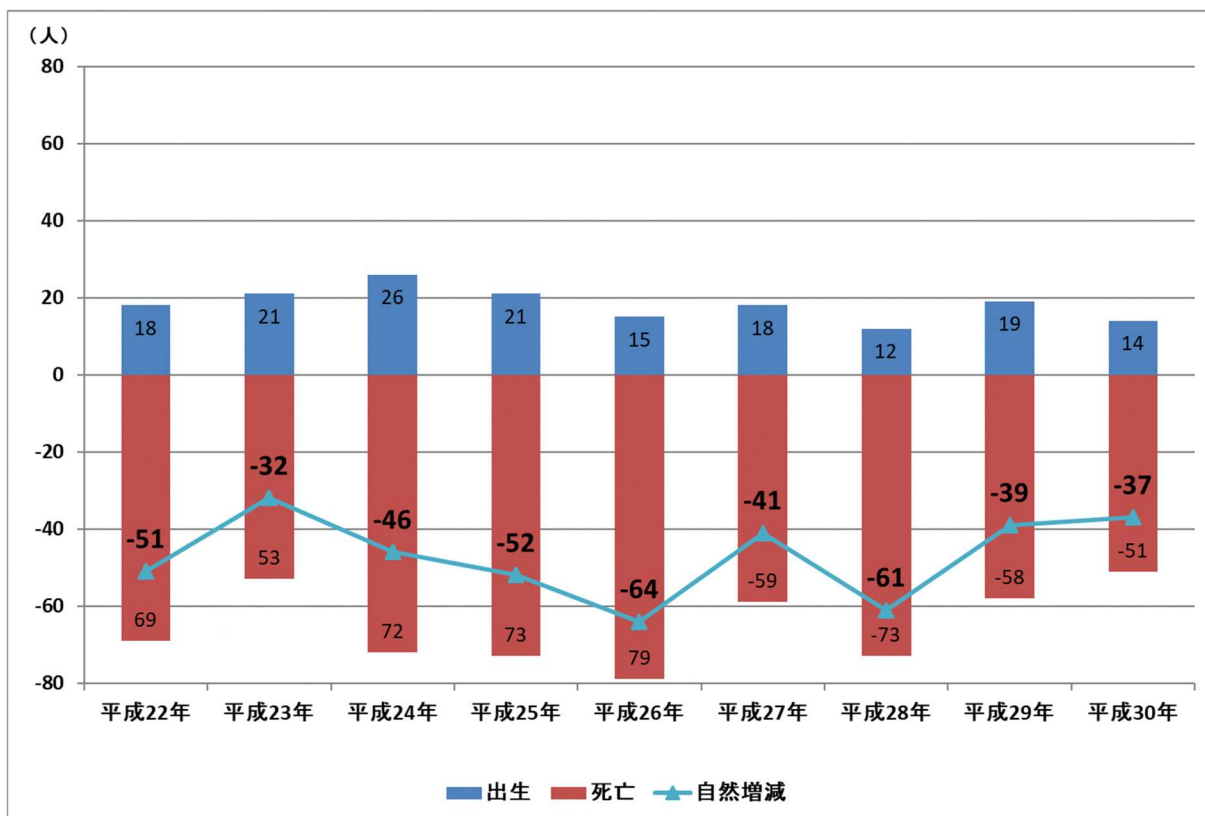
### (3)人口動態

#### ①自然動態の推移

各年の出生数と死亡数のデータから、島しょ地域の自然動態の推移を分析します。

#### ◆島しょ地域の出生数・死亡数の推移

資料：住民基本台帳



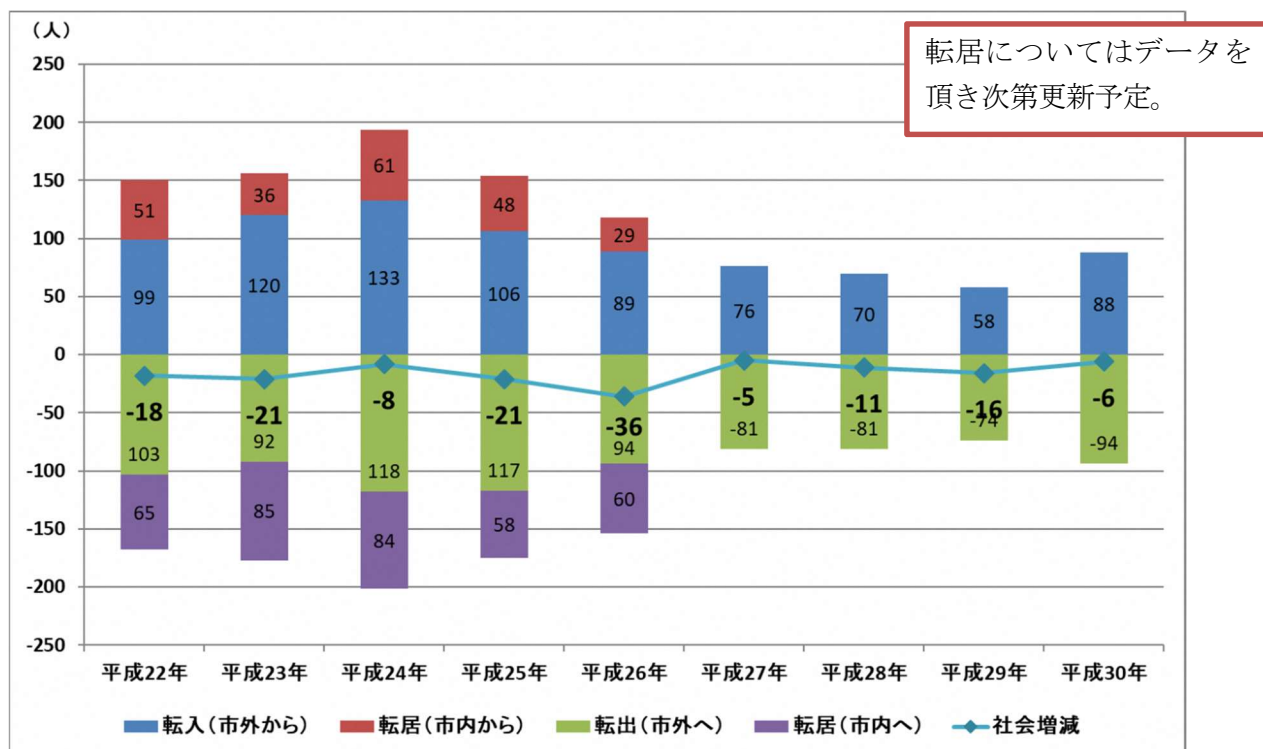
- 島しょ地域の出生数及び死亡数の推移を見ると、死亡数が出生数を大きく上回っており、その差は近年さらに拡大する傾向にあります。なお、死亡数については、高齢化の進行に伴い増加が予想されることや、出生数の増加が見込めない現状では、さらに自然減による人口減少が一層進むものと推測されます。このため、出生数の増加を図るような施策に取り組む必要があります。

## ②社会動態の推移

各年の島しょ地域の市外からの転入数と市外への転出数、市内他地域からの転居数と市内他地域への転居数のデータから、島しょ地域における社会動態の推移を分析します。

### ◆島しょ地域の転入者数・転出者数の推移

資料：住民基本台帳

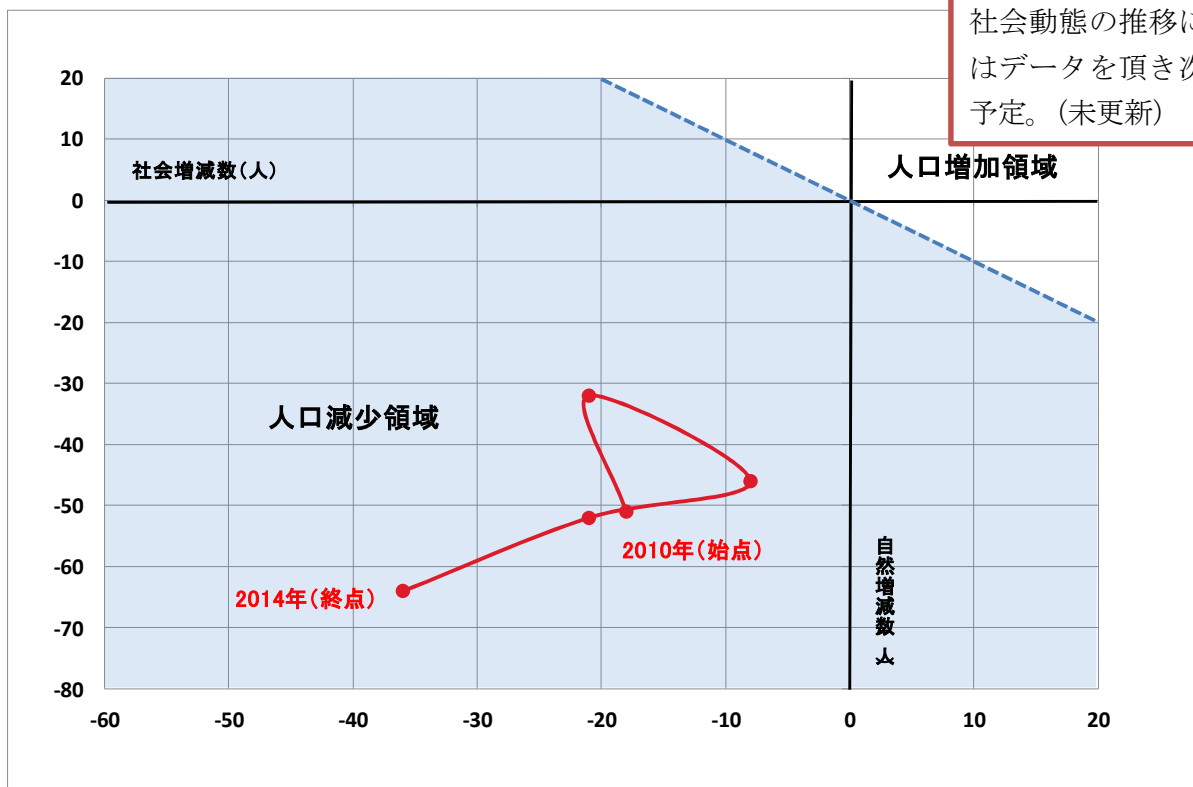


- ・ 島しょ地域における各年の市外からの転入数と市外への転出数の推移を見ると、市外からの転入に比べ、市外への転出は意外に多くないことが分かります。
- ・ 逆に、島しょ地域の市内他地域からの転居数と市内他地域への転居数を比較して見ると、市内他地域への転居数の方が多いたことが分かります。このことから、島しょ地域では、市内他地域への転居による人口流出が社会減の最も大きな要因となっているものと推測されます。



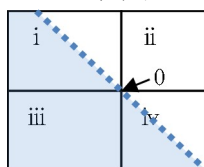
◆総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響

資料：住民基本台



帳

(注) グラフの位置関係については以下のとおりである。



i : 自然動態プラス、社会動態マイナスの状態を表すエリア  
 ii : 自然動態プラス、社会動態プラスの状態を表すエリア  
 iii : 自然動態マイナス、社会動態マイナスの状態を表すエリア  
 iv : 自然動態マイナス、社会動態プラスの状態を表すエリア  
 破線：人口均衡ライン

- このグラフは縦軸が出生数から死亡数を差し引いた「自然増減数」、横軸が転入数から転出数を差し引いた「社会増減数」となっており、各年のそれぞれの数値を合算して示したものです。網掛けされた部分は人口が減少となる領域を示しています。
- このグラフから、島しょ地域では過去5年間、自然増減数と社会増減数ともに負の値を示しており、このことから人口減少が大きく進んでいる状況が分かります。
- 減少の割合としては自然減の方が大きく、出生数の上昇が課題と言えます。また、社会減の増加も懸念されることから、その対策も必要になると考えられます。

## 2-2 将来人口の推計と分析

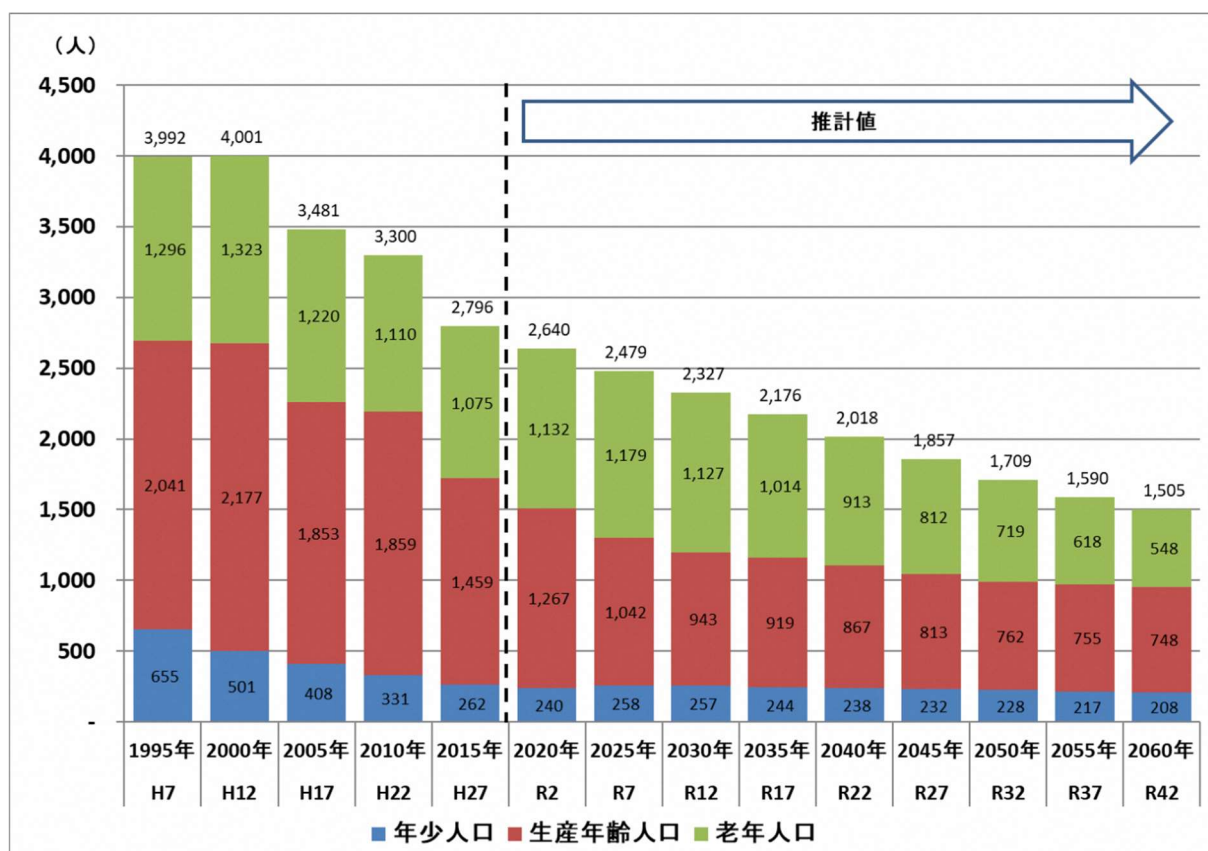
### (1) 社人研の推計による結果

#### ア. 将来人口推計

国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）による「日本の地域別将来推計人口（平成 30 年 3 月推計）」を活用し、島しょ地域の将来の人口推計について分析します。

#### ◆総人口の推移

資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成 30 年 3 月推計）」



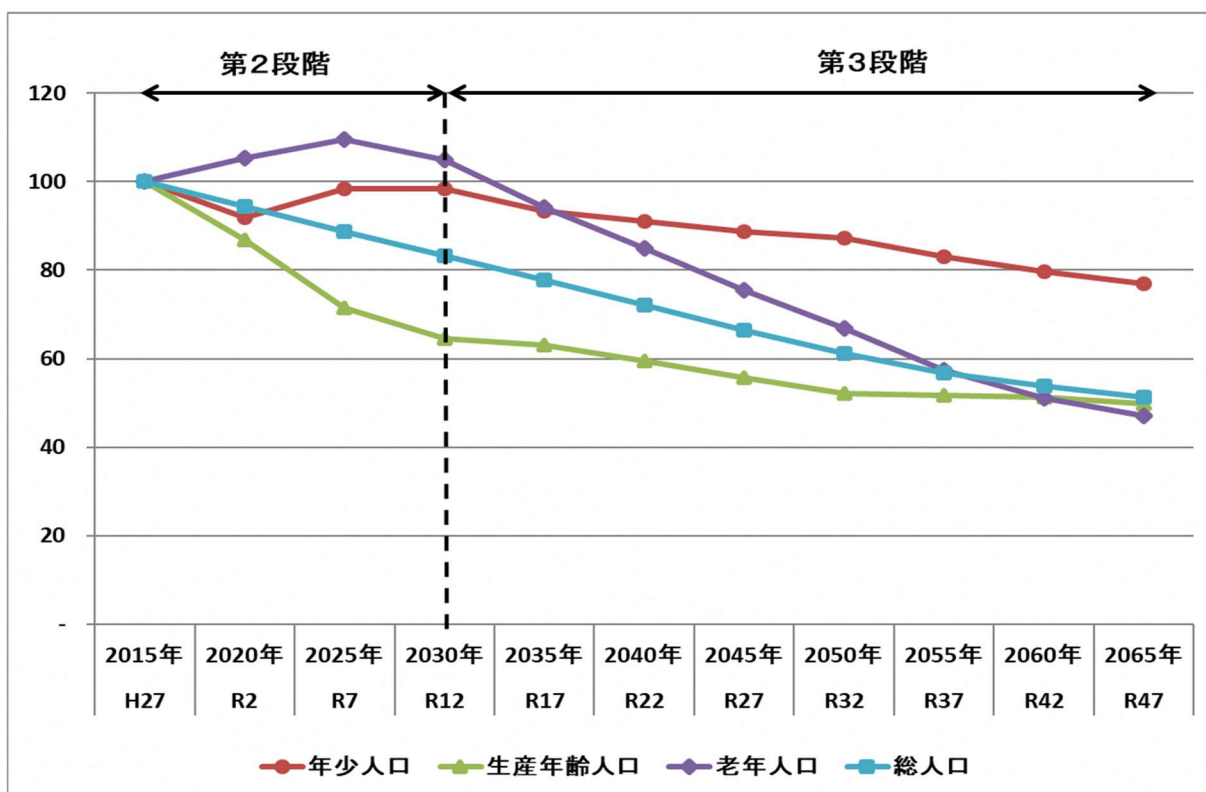
- ・ 島しょ地域の人口推計を見ると、総人口数は今後も一貫して減少を続け、令和 42（2060）年頃には、平成 27（2015）年の半数近くとなる 1,500 人程度まで減少すると推計されています。
- ・ 次に、年齢 3 区分別の推移を見ると、生産年齢人口は、すでに平成 12（2000）年頃をピークに減少段階に入っており、令和 42（2060）年には平成 27（2015）年の半数程度になる推計となっています。
- ・ 老年人口については、令和 7（2025）年頃までは微増傾向にありますが、それ以降は減少に転ずる推計となっています。これは、島しょ地域の人口が既に減少段階にあり、老年人口となる次の世代が減少していることが要因と推測されます。
- ・ 年少人口についても、一貫して減少傾向にあり、中・長期的には減少幅は緩やかになる推計となっていますが、年少人口そのものが非常に少ない状況が続くものと考えられます。

## イ. 人口減少段階の分析

社人研による「日本の地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」を活用し、島しょ地域の将来の人口減少段階について分析します。

### ◆人口減少段階の分析

資料：国立社会保障・人口問題研究所日本「地域別将来推計人口（平成30年3月推計）」



- 社人研の推計によると、平成27(2015)年の人口を100とした場合の老年人口の指標は、令和12(2030)年を境に減少段階に入ることから、島しょ地域の人口減少段階は次表のとおりとなり、令和12(2030)年までは「第2段階」、それ以降は「第3段階」に入ると推測されます。市内の他地区よりもいち早く人口減少段階が進んでいます。

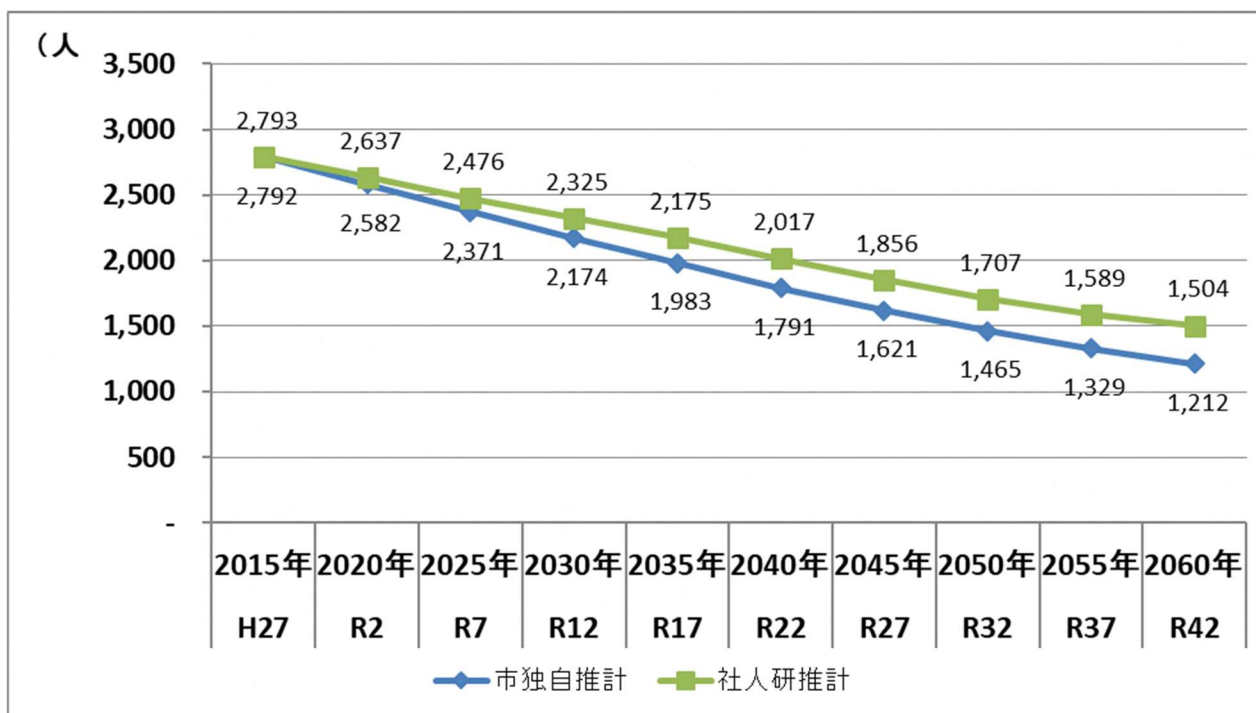
(注1)人口減少段階につきましては、「第1段階：老年人口の増加（総人口の減少）」「第2段階：老年人口の維持・微減」「第3段階：老年人口の減少」の3つの段階を経て進行するとされます。

(注2)平成27(2015)年の人口を100とし、各年の人口を指数化しました。

人口減少段階	分類	平成27(2015)年	令和12(2030)年	平成22年を100とした場合の平成57年の指数
2 → 3	老年人口	1,075	1,127	105
	生産年齢人口	1,459	943	87
	年少人口	262	257	92

## (2)市独自の推計による結果

### ◆人口の推移

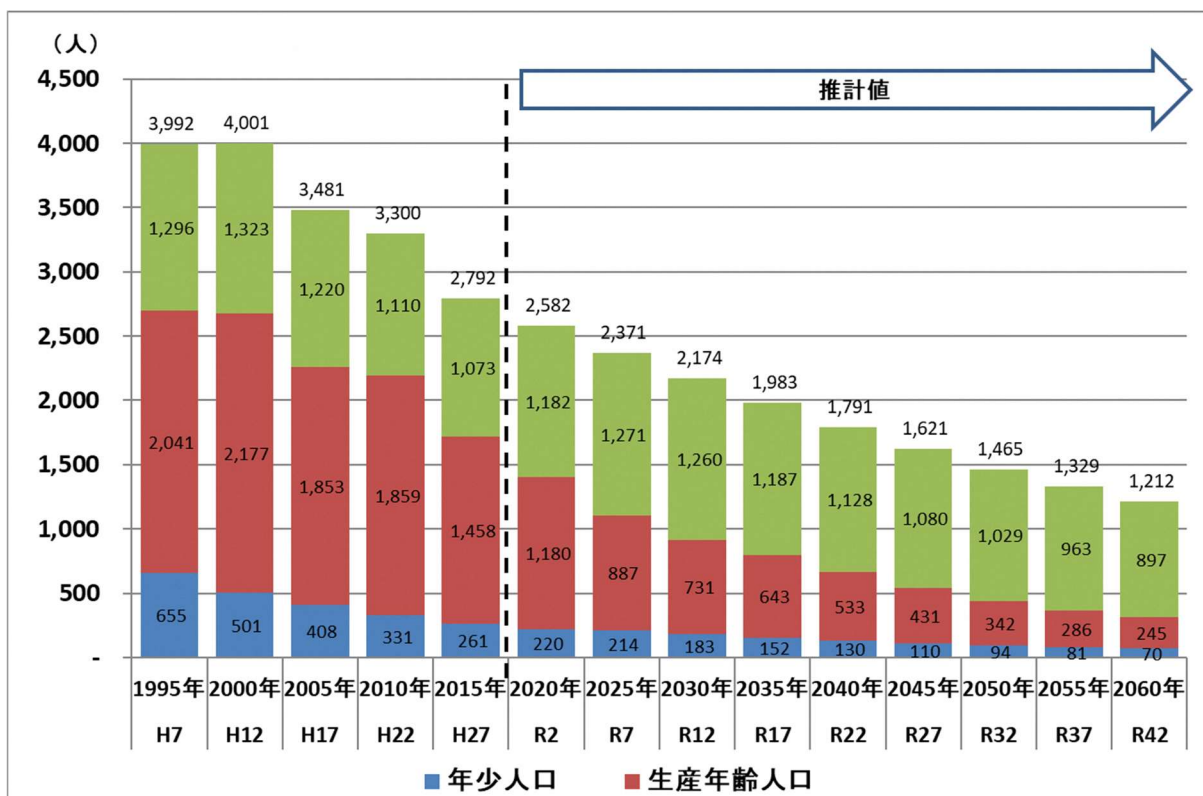


- ・ 市独自の推計を見ると、社人研の推計と比較して、増加幅が大きく、一貫して減少傾向にあります。令和42年(2060)年には1,212人と平成27(2015)年より1,500人程減少する見込みとなっています。
- ・ 市独自の推計は実績値に基づいており、社人研の推計よりも大幅な人口減少が見込まれています。現状維持を想定すると、島しょ地域においては、大幅な人口減少が避けられないことが推測されます。

(注1)市独自の推計については、平成27年国勢調査人口を基準に、生存率、純移動率、子ども女性比、合計特殊出生率、0歳～4歳性比に仮定値を設定し、コーホート要因法により推計しています。生存率や子ども女性比、0歳～4歳性比については社人研の値を利用し、純移動率は平成22(2010)年～平成27(2015)年の純移動率が令和42(2060)年まで一定で推移するものとして利用しています。合計特殊出生率については、過去の実績値に基づき、社人研の値を補正した値を利用しています。

(注2)年齢不詳者の取扱いは、厚労省「国勢調査の実績人口データに基づく推計」のデータ補正方法に基づき、年齢不詳者を按分しているため、人口の現状分析における実績値と合致しない。

◆年齢3区分別の人口推移



- ・ 老年人口については、平成 27 (2015) 年から令和 12 (2030) 年まで増加傾向を示し、令和 12 (2030) 年における島しょ地域の総人口に占める割合は 6 割弱です。総人口の半数以上が老年人口であることを指す限界集落に当てはまる値であり、社会的共同生活の維持が困難となる恐れがあります。令和 12 (2030) 年以降の老年人口は、減少傾向になると予測され、令和 42 (2060) 年には 897 人と平成 27 (2015) 年の 1,073 人の約 8 割まで減少する見込みです。
- ・ 生産年齢人口については、平成 12 (2000) 年以降概ね減少傾向となっており、平成 27 (2015) 年現在、島しょ地域の総人口の約 5 割強を占めていますが、令和 12 (2030) 年には約 3 割強と総人口に占める割合が少なくなっています。そのため、将来人口の維持・増加を図るためには、子育て世代を中心とした人口誘導が有効であると考えられます。
- ・ 年少人口については、平成 27 (2015) 年現在、島しょ地域の総人口の約 1 割を占める程度となっており、今後も総人口の減少に伴って年少人口も減少する傾向にあります。

## 2-3 人口の変化が地域の将来に与える影響の分析・考察

---

### (1)人口減少の原因分析

これまでの分析で示したように、島しょ地域の人口は既に減少が始まっており、令和 42 (2060) 年には平成 27 (2015) 年の半数以下まで減少するといった厳しい推計となっています。

この要因としては、生活の利便性や働く場を求めて若い世代が市外及び市内市街地へ流出してしまったことが挙げられます。また、子どもを産む若い世代が流出したことにより、出生数が減少し、必然的に高齢者比率が高くなり、死亡数が出生数を大きく上回ってきたことも大きな要因として挙げられます。

### (2)人口の変化が地域の将来に与える影響と課題

本市の島しょ地域においては、前述したように、今後、人口減少が大きく進むと推測されており、そのことが地域に与える大きな影響としては、地域コミュニティ活動の低下が挙げられます。すでに、島しょ地域では全人口が 200 人前後という小規模な自治会が多数を占めており、さらに人口減少が進むと、自治会の存続にも関わる深刻な課題となっています。

その他にも、若い世代が流出することによる高齢者の孤立、後継者不足による農業・漁業・観光業など地場産業や伝統芸能・文化の衰退も課題となります。

※アンケート実施後に記載。